歯学だより Vol. 9

（平成 25 年度広報誌）

2014 年

岡山大学歯学部

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 歯学系

岡山大学病院 歯科系 広報専門部会

目次

◇ 学部長より
「歯学便りに向けて」　岡山大学歯学部長　窪木拓男　5

◇副病院長より
「国立大学附属病院（歯科系）の今後のあるべき姿について考える」
前岡山大学病院歯科系代表副病院長　森田　学
8

「臨床実習の質の確保のための課題」
岡山大学病院副病院長（歯科系教育・研究担当）宮脇　卓也　10

◇　副研究科長より
「大学院医歯薬学総合研究科から」
岡山大学大学院医歯薬学総合研究科　副研究科長　浅海 淳一　12

◇ 退職・着任・転出教員より
【退職】
「口腔生化学分野退任のご挨拶とこれから～」　口腔生化学分野　滝川 正春　14

【着任】
「就任のご挨拶」　歯科矯正学分野　上岡　寛　16

「着任のご挨拶」　口腔顎顔面外科学分野　志茂　剛　18

「着任のご挨拶」　口腔機能解剖学分野 丸濱 功太郎　19

「着任のご挨拶」　インプラント再生補綴学分野　大島 正充　20

「着任のご挨拶」　新医療研究開発センター　大野(木村)　彩　21

「着任のご挨拶」　歯周病態学分野　下江 正幸　23

「着任のご挨拶」　咬合･有床義歯補綴学分野　川上　滋央　24

「着任のご挨拶」　咬合･有床義歯補綴学分野　前田　直人　25

「着任のご挨拶」　歯科矯正学分野 住吉 久美　26

「着任のご挨拶」　小児歯科学分野　藤田一世　27

「着任のご挨拶」　小児歯科　山﨑由衛　28

【転出】

「転出のご挨拶」　大阪大学大学院歯学研究科　顎顔面口腔矯正学教室　山城　隆　29

「転出の御挨拶」　大阪大学大学院歯学研究科　顎顔面口腔矯正学教室　伊藤　慎将　30

「阿波の国からご挨拶と近況報告」　徳島大学病院　歯科第二補綴科　上枝 麻友　31

「転任のご挨拶」　愛知学院大学歯学部　口腔衛生学講座　入江　浩一郎　32

◇【本年度の活動】

「第 3 回岡山医療教育・研究国際シンポジウム」を開催
インプラント再生補綴学分野　縄稚久美子　34

「第５５回歯科基礎医学会学術大会・総会を終えて」
第５５回歯科基礎医学会準備委員長、口腔生理学分野　松尾龍二　36

「沖縄県心身障害児（者）全身麻酔下歯科治療事業への参加」
歯科麻酔・特別支援歯学分野　友安弓子　38

◇【診療科トピックス】

「岡山大学病院　頭頸部がんセンター　歯科診療チーム　楷の木賞（病院長賞）受賞」
口腔外科再建系、岡山大学病院頭頸部がんセンター センター長補佐　水川展吉　40

「岡山大学若手トップリサーチャー研究奨励賞」を受賞して　予防歯科　江國　大輔　42

◇　【海外より】

「NIH留学記」　インプラント再生補綴学分野　前田あずさ　43

「留学記」　歯科矯正学分野　黒坂　寛　45

◇　【留学生レポート】

「An amazing experience」

Thaise Mayumi Taira, Dental student of University of Sao Paulo 47

「Two amazing months!!!」
Bianca Mitsue Goulart Sobue Dental student of University of Sao Paulo 50

「Hello everyone~」 Yeh, Pei Cheng , School of Dentistry, Taipei Medical University 53

「International Exchange Student Program Report」
Wu, Shiu-Sien (吳琇璇), School of Dentistry, Taipei Medical University 54

◇【岡山歯学会奨励論文受賞者寄稿】
「岡山歯学会　優秀論文賞を受賞して」 歯周病態学分野　工藤　値英子 56
「岡山歯学会　優秀論文賞を受賞して」 矯正歯科　菅原　康代 58

「岡山歯学会　奨励論文賞を受賞して」 歯学部先端領域研究センター　青山　絵理子 59

◇【卒後臨床研修センターより】
「理想の歯科医師像」 総合歯科　河野　隆幸 60

◇　【学部学生より】
「スチューデント･クリニシャン･リサーチ･プログラム」 歯学部 5 年 王 碩 61

◇　【歯科衛生士室から】
「平成２５年度　歯科衛生士室　活動報告」 歯科衛生士　三浦　留美
歯科衛生士　高橋　明子 63

◇　【技工室から】
「平成 25 年度の技工室」 診療支援施設技工室　神　桂　二 66

◇　【編集後記】 69

歯学便りに向けて

岡山大学歯学部長
窪木拓男

皆さん，お元気でしょうか．窪木の方は，皆さんのご支援を頂き，もう一期歯学部長を務めさせて頂くことになりました．全力で岡山大学歯学部，ひいては国民に貢献したいと考えておりますので，どうかご支援を頂けましたら幸いです．さて，歯学部の近況をご紹介したいと思います．ミッションの再定義と第3回岡山医療教育・研究国際シンポジウムが，平成 25 年度の岡山大学歯学部の将来を占う重要イベントでした．

ミッションの再定義から説明致します．国家財政が逼迫している中，文部科学省や財務省から，なぜ岡山大学歯学部は国立大学である必要があるのか，なぜ国立大学である岡山大学歯学部が岡山に存在する必要があるのかと問われたのがミッションの再定義と呼ばれる組織目標再設定事業です．これを一言で表現できればよいのですが，歯科医師養成というコアカリキュラムを広く達成する必要に迫られるなか，なかなかそのプラスアルファの部分の個性を一言で言い表すのは簡単ではありません．全国の国立大学がこのような問を浴びせられ，これにエビデンスを持って応えるように指示を受けたのが本事業です．岡山大学歯学部でも，若手の教員を中心とした将来構想検討WGを組織し，あらゆる面から歯学部を評価するエビデンスを諒承しました．岡山大学歯学部には，口腔保健学科がありません．すなわち，歯科医師養成に特化した国立大学です．一方，岡山大学の臨床医学分野の研究業績は第2層に位置し，トムソンロイターの歯学系論文カテゴリーにおける総被引用数は全国の国立大学で2位，論文あたりの相対被引用数はこの10年間全国1位となっています．長崎大学歯学部と同じく，最も若い歯学部であり研究力も高いのが特徴です．文部科学省の科学研究費補助金の採択率も岡山大学の他の部局と比較してもダントツです．歯科系大学病院の診療報酬請求額も，①東京医科歯科大学歯学部，②大阪大学歯学部，③岡山大学歯学部，④北海道大学歯学部，⑤九州大学歯学部，⑥東北大学歯学部と優れています．また，診療参加型臨床実習の充実に欠かせない外来歯科患者数も，東京医科歯科大学に引き続いて，大阪大学，北海道大学とともに第2位グループを形成しています．同窓会員の現住所をまとめて見ると，①大阪府，②岡山県，③兵庫県，④広島県，⑤京都府となっており，関西圏から中国地方にかけて優秀な歯科医師を供給している中国地方の歯学部と言っても良いかもしれません．最近では，医療支援歯科治療部（周術期管理センター）やスペシャルニーズ歯科センターを核とした医科・歯科連携が岡山大学歯学部の売りであります．また，在宅介護医療における歯科の役割を教育するシステム作りでも1日の長があります．この医科・歯科連携が効を奏したのか，文部科学省　研究大学強化促進事業，ガンプロ養成基盤プログラム拠点校，厚生労働省　臨床研究中核病院支援事業のような巨大グラントが立て続けに採択されており，岡山大学医療系学部が関西圏～中国四国地区の中核医療教育研究機関であることは間違いないと思わせるような勢いです．もちろん，このような結果に奢ることは許されませんが，岡山大学歯学部が国立大学として継続支援されることを心から願うばかりです．

一方，本邦の経済の停滞や留学生の減少をバックグランドに，歯学部における国際交流が新たな重要競争テーマとして浮上しています．人口が減少局面に至ったこともあり，本邦が国際社会においてガラパゴス化されたままではどうにも勝ち残れないことが明白になったのです．官邸や文部科学省は，世界大学ランキングの100位以内に10校の国内大学を送り込もうとしており，そのための支援を政策的に推し進め始めました．例えば，平成26年度に募集されるスーパーグローバル大学支援事業がそれです．シンガポール大学のように，優秀な研究者を年俸制で日本に招聘すること，世界的なラボをラボごと日本に招くことなどもそのビジョンに示されております．少なくとも，国際社会で生き抜くためのスキルを身につけるため，学部レベル，大学院レ

ベルでの国際交流を積極的に推進するように国家的なドライブが掛かっているのです．幸いにも，永井名誉教授が創設された ODAPUS に代表されるように，岡山大学歯学部はこれまで盛んに国際交流を進めて来ています．平成25年に至っては，歯学部生53名のうち14名が海外の大学（大連医科大学，カリフォルニア大学，サスカチュワン大学，ハサヌディン大学，ハイフォン医科大学，ブリティッシュコロンビア大学，台北医学大学，サンパウロ大学）で数ヶ月学んできています．なんと，平成13年から平成25年までに，80名の学生が海外で短期留学を経験してきたことになります．昨年度から，皆木教授に御世話をいただき，インドネシアのハサヌディン大学から2名の非常に優秀な学生を ODAPUS と同時期に受け入れました．今年は，これをハイフォン医科大学，台北医学大学，サンパウロ大学などに拡大しています．このために，留学生向けの歯学部英語講義シリーズを開講し，大変好評を博しています（図1）．来年度は，岡山大学として，何が何でもスーパーグローバル支援事業を獲得することが期待されています．

図1　歯学部英語授業シリーズ（サンパウロ大学と台北医学大学の面々と）

図2　第3回岡山医療教育・研究国際シンポジウム（Prof. Amar による乾杯）

図3　第3回岡山医療教育・研究国際シンポジウム（ブラジル，香港，韓国グループ）

そのためではありませんが，岡山大学歯学部は平成 25 年度，第3回岡山医療教育・研究国際シンポジウムを開催しました（図2～5）．カナダのトロント大学歯学部，台湾の台北医学大学歯学部，ブラジルのサンパウロ大学歯学部，タイのチュラロンコン大学，マヒドン大学歯学部，マレーシアのマレーシア大学歯学部，モンゴルのモンゴル大学歯学部，バングラデシュのサフェナ女子歯科大学，中国の中国医科大学，大連医科大学，香港大学，インドネシアのハサヌディン大学，韓国のソウル大学，シンガポールのシンガポール大学，ベトナムのハノイ大学歯学部，ハイフォン医科大学，アメリカのルイジアナ州立大学歯学部などから歯学部長クラスの要人を多数迎え，岡山大学歯学部との連携を確認し合いました．名誉教授の先生方にもご来駕頂き，心から感謝を申しあげております（図6）．特に，今回アジアからお呼びした学部長により，アジア学部長会議を創設し，アジアの歯科医学教育・研究の連携強化と個人的な親睦を図ることができたことは，アジアの各国の主要歯学部に「研究力があり医科・歯科連携が盛んな岡山大学歯学部あり」という記憶を永く残したこと

と思います．このような経験を通じて，アジアの国と国が本当にボーダーレスの世界に突入していることを強く感じるとともに，うかうかしているとアジアの有名校から大きく引き離されてしまうという危機感も同時に感じます．このような中で，ベトナムのハイフォン医科薬科大学と協力して International Dental Center を開設することになったことは大変喜ばしいことです．派遣された中島先生には，アジアの医療系大学や歯科医療現場に関連企業とともに懐深く潜入して，日本の実力を見せつけて欲しいと思います．

平成 25 年度は，本当に息をするのを忘れるような忙しい時を過ごしました．歯学部長にならせて頂いた際に，皆さんと一緒に，「日本一の歯学部を創りませんか」と問いかけたのを思い出します．少しずつ夢が叶いつつあるようにも感じますし，まだまだと思うこともあります．いま一度，初心を思い出して，みんなで日本一の歯学部を創りませんか．みんながその夢を忘れずに努力を惜しまなければ，必ずその夢は実現すると思います．私も，故郷の平櫛田中翁の「今やらねばいつできる．わしがやらねば，だれがやる．」という言葉を思い浮かべながら，毎日少しずつの努力を精一杯務めさせて頂いております．教員の先生方や学生諸氏のご尽力を今一度頂戴し，この一年，精一杯努めさせて頂けたらと思っております．

図4　第3回岡山医療教育・研究国際シンポジウム（インドネシア，マレーシア，バングラデシュグループ）

図5　ウエルカムパーティの二次会（チュラロンコン大学歯学部長，ソウル大学歯学部長といっしょに）

図6　ウエルカムパーティには，山下名誉教授，村山名誉教授にも来て頂きました

「国立大学附属病院（歯科系）の今後のあるべき姿について考える」

森田　学（前岡山大学病院歯科系代表副病院長）

「社会情勢や医療構造の変化への対応」という問題に、あらゆる医療系組織が直面しています。この問題は今に始まったことではありません。人間社会が発展・成熟してきた過程においては、常に引用されていたフレーズです。その内容が時代とともに変わっただけに過ぎません。全国国立大学歯学部附属病院長会議でも、時代の変化に対応すべく 5 つのテーマについて課題と提言をまとめました。次頁の表をご覧ください。

さて、概念ばかり並べても何も伝わってきません。すでに行われている先進的・具体的な取り組み例をいくつかご紹介します。

＜教育＞

東京医科歯科大学では、医学科と歯学科の学生が同じ教室や実習室で学ぶ医歯学融合教育を実施しています。3 年次の老年医学ブロックでは、医学科、歯学科、口腔保健学科の学生がそれぞれの専門性を発揮し、相互実習を行っています。

＜診療＞

皆様よくご存知の岡山大学病院周術期管理センターです。歯科のスタッフが、医師，看護師，薬剤師，診療放射線技師，理学療法士，管理栄養士，臨床工学技士とともにメンバーを構成しています。

＜研究＞

医科と歯科が一つになった病院では、共用施設や診療科間の連携によって歯科領域の先端研究が推進されています。広島大学病院歯科においては、癌に対する高度先進医療としての N/LAK 療法という細胞治療や顎骨から骨粗鬆症診断を行うという支援システムがこのような連携の下で実施されています。

＜地域貢献･社会貢献＞

新潟大学病院は、東日本大震災被災者への継続的な支援を行うとともに、行政、医療福祉関係者、一般住民等への災害時歯科保健医療活動を提供しています。

＜国際＞

遠隔医療教育ネットワークの会議 Asia-Pacific Advanced Network が 2014 年 1 月にインドネシアで開催され、Comprehensive Medical Care for Cleft Lip & Palate Patients をテーマとした歯科のセッションが設けられ九州大学が中心となって参加しました。

いかがでしょうか。ほかにアイデアをお持ちの方がおられたら、遠慮なく意見してください。「何故、岡山大学の附属病院（歯科系）が、国民からいただいた税金を使ってまで存続しているのか？　そして今後もそうあるべきなのか？」、その答えを読者の皆様と共に考える題材になれば幸いです。

テーマ	課題	提言
教育	・卒前教育の中だけで基本的臨床能力を獲得することは困難 ・地方病院の歯科口腔外科の廃止による地域医療、研修歯科医教育における負担増	・歯学部・医学部学生に対する、より実践的な卒前臨床教育を実施する。 ・高い専門的技能を持つ総合歯科医の養成システムを構築する。 ・地域医療システムにおける専門職連携のための教育へ積極的に参画する。 ・高度な歯科医療と社会のニーズに対応できる歯科医療関連専門職を育成する。
診療	・患者本位の安全・安心で良質な歯科医療を提供するための基盤整備が不十分 ・高度で先進的な歯科医療を提供していく上で，保険診療上の制約が多数存在 ・諸外国に比べ，新薬承認や医療機器の製造販売承認に遅れ	・新しい歯科医療診療体制を構築する。 ・チーム医療や地域における医歯連携の強化を図り、病院歯科の再構築を行う。
研究	・研究に専念できる時間が減少 ←診療負担の増加、研修歯科医の指導負担の増加	・研究実施体制を確立するために大学間ネットワークを構築推進する。
地域貢献・社会貢献	・地域の歯科診療の拠点としての期待 ・災害時の歯科医療支援活動の拠点としての期待と実現の困難さ	・地域歯科医療における医療連携の一層の充実を図る。 ・大規模災害時における歯科保健活動の重要性を啓発し、各地域の災害医療体制に積極的に参画する。
国際化	・断片的で広がりのない国際化 ・教育研修、研究等でのネットワーク化の推進の必要性	・海外の国々における基幹病院を確立し、ネットワークを構築して歯科医療連携の体制を整備する。 ・海外における歯科医療技術の相互交流を図り、教育体制を確立する。

「臨床実習の質の確保のための課題」

岡山大学病院副病院長（歯科系教育・研究担当）
宮脇　卓也

歯科系教育・研究担当副病院長を拝命し３年がたちましたが、この4月から再任されましたので、引き続き岡山大学、岡山大学病院、歯学部の発展に尽くしたいと存じます。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

歯科系教育・研究担当副病院長としての役割は先の３年間と変わりなく、臨床実習実施部会長として歯学部学生の臨床実習の責任者であるということ、さらに病院での臨床教育に関して主に、卒後研修歯科医の教育、コ・デンタルスタッフの教育を支援する立場にあります。

この中でも、昨年の「歯学便り」と同様に、今年も臨床実習について述べさせていただきます。その理由として､近年､歯学教育の中で臨床実習の充実の重要性がますます強調されているからであります。岡山大学歯学部の臨床実習の内容は、実質的には臨床の教員の先生方のご尽力で、すでにかなり充実していると確信しております。岡山大学歯学部の臨床教育の方針として、「一口腔一単位の患者本位の全人的医療」を伝統としており、他大学に対して自負できるものであります。しかし、まだ「社会」に求められているものがあります。

何が求められているのか。端的に言うと､「歯科医師資格の国際認証制度に十分対応できる質の確保」です。昨年も述べましたように、医科ではかなり危機感をもって変革が進んでいます。つまり、海外と比較して日本の臨床実習が十分でないという事実に基づき、各大学で急速にその対策が立てられています。歯科での「国際認証制度」は、まだ、全世界で統一されたものではありませんが、臨床実習の充実が重要なポイントになっているようです。これに関して全国的なワーキンググループが立ち上がっており､岡山大学の窪木拓男歯学部長もこのグループのメンバーに加わっておられます｡別の見方をすると、「国際認証制度」は外圧であり、いわゆる「黒船」ですが、その本質は「質の確保」です。

質の確保のために、具体的に何が必要であるか。私が必要と考える課題として、以下の4点を挙げてみました。

１．　臨床実習終了時の客観的臨床能力試験（Advanced OSCE）の組織的な実施
２．　基礎学力のアップ
３．　臨床実習シミュレーション教育の充実
４．　岡山大学歯学部臨床実習の「見える化」

第１の課題であるAdvanced OSCEについては、通常のOSCEが臨床実習を始まる前の基本的臨床能力を評価するのに対して、Advanced OSCEは臨床実習によって習得した臨床能力を評価するものです。重要なことは、これが客観的に行われなければならない点であり、そのためには複数の評価者、それもそのうちの一人は担当診療科以外の評価者、できれば他大学の評価者を置く必要があることです。つまり、単独の診療科で評価するのではなく、現行のOSCEと同様に歯学部として組織的に行う必要があります。

第２の課題である基礎学力のアップについては、昨年度、飯田教授、十川准教授をはじめ部会の先生方がご尽力された「歯学のまとめ」に該当します。まず、担当された先生方に敬意を表したいと思います。しかし、本来、これらは臨床実習と独立した講義のかたちではなく、臨床実習の中に組み込んで、臨床実習をすることで、基礎学力もあわせてアップするようなシステムが必要です。そのためには、基

礎分野のすべての教員の先生方にも臨床実習に関わっていただく必要があると私は考えております。今後、歯学部全体で検討していく必要があるでしょう。

第３の課題は、臨床実習シミュレーション教育の充実です。臨床の現場での実習だけでは、十分習得できない技能があり、それをシミュレーション実習で習得する必要があり、また、臨床の現場での実習を補完するためのシミュレーション実習が必要です。岡山大学では、すでに一部の診療科で実施されていますが、まだまだ充実させる余地が残っています。

第４の課題は、岡山大学歯学部の「見える化」です。これは「質の確保」とは直接関係ないのですが、岡山大学歯学部での臨床実習教育の良さを、社会に対して「見えるかたち」にして発信しなければ正当に評価されない、ということです。自分たちの自己満足だけで終わっていれば、正当に評価されません。ひとりひとりの教員のモチベーションも下がり、全体のモチベーションも下がります。たとえば、患者の皆様用のパンプレットの作成など、もっと「見える化」を進める必要があります。

以上、課題ばかりを示しましたが、最初に述べましたように、現行の岡山大学歯学部の臨床実習の内容は、実質的には臨床の教員の先生方のご尽力で、かなり充実していると確信しております。このレベルを維持しつつ、先の課題を克服し、さらに岡山大学独自に進めている「医療支援歯科治療実習」「他職種連携実習」「在宅・訪問歯科診療実習」「電子ログブックを用いたエビデンスに基づいた臨床実習」などの新しい取り組みを推進していけば、国際認証制度の制度設計に大きく影響を与えることができ、世界の臨床実習を先導できる力を有していると信じております。これからの３年間、「岡山大学歯学部の臨床実習」の発展のために、わが身を捧げる所存です。

何卒よろしくお願い申し上げます。

「大学院医歯薬学総合研究科から」

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 副研究科長
浅海　淳一

副研究科長に就任し、2年になります。

今年も皆様に便りをお届けする時期がきました。皆様お元気でお過ごしのことと思います。

さて、現在、大学院教育の中で求められているのは、グローバル化と地域連携です。世界と地域、一見両極端な話が同時進行しています。

地域連携に関しては、もともと岡山大学自体が学都岡山を目指しておりますので、マッチした内容と思います。岡山大学は、ピッツバーグ、ストラスブール、ポートランドといったアメリカ、フランスの大学をモデルとして学都を目指しています。幸い、岡山大学は、臨床中核病院の一つに選ばれてもおりますので、岡山の地域というより、中国、四国での中心的役割を求められています。臨床、研究を行う上での倫理を含めた法的整備が進められる中、研究の倫理審査などの役割も岡山大学が担うべきとの方向です。現在、学会発表や論文投稿時における問題が出てきております。倫理規定やCOIに関しては、研究者みんなが認識しなければなりません。そして、岡山県、岡山市、地域企業、岡山大学などからなる産学官連携のいろいろな構想も進められています。地域社会が岡山大学と一体となって、欧米のように何時なんどきでも先進的なことが学べ、研究できる体制づくりが必要ということと思います。在宅医療が推進される中、地域における医療現場での連携の教育が必要と考えます。学生にとっては、大学だけでは教育しきれない地方医療の現状を学ぶことができる絶好の機会です。

一方、国際化に関しては、隣の広島大学と比べて遅れているように思います。医歯薬学総合研究科におきましても、様々な国の大学と交流を進めています。特に最近は中国、東南アジアのミャンマー、ベトナム、インドネシア、タイなどの国と交流を深めています。さらに多くの教員が海外との新たな交流を進めようとしています。私も平成25年度は、南米に三度足を運んだ際に、いくつかの大学と協定の話をしてきました。まず１つ目は11月にベネズエラの第1回の歯科放射線学会に参加した時に、2つの大学と学部間協定の話をしてきました。今年5月にその1校が学部間協定書を持って来岡することになっています。2つ目はブラジルの学会に行った時に、リオデジャネイロ州立大学を訪問し、講演時に岡山大学のコマーシャルもしました。帰国後大学間協定の話を進めています。3つ目はサンパウロ大学には3つの歯学部がありますが、2つの歯学部と学部間協定を結び、現在も活発に交流しています。現在3つ目の歯学部と学部間協定を進行中で、同時にサンパウロ大学と大学間協定を進めています。ただ、南米という遠い国との交渉ですので、スムーズに進行しているとは言えないのが現状です。地道に辛抱強く進めて行く必要があります。この様に平成25年度は南米シリーズでしたが、26年度は打って変わって、インドネシアでの学会とシンポジウムに3回訪れる予定です。6月と11月にはすでに学部間協定のあるハサヌディンです。11月にはそれとは別に歯科放射線のアジア学会がバリであります。この学会を主催するのは、Padjadjaran大学ですが、協定の話をする予定になっています。加えてこれまで通り欧米との交流もさらに進めて行く必要があります。

最後に、現在の最も大きな仕事は、平成25年度から2年間かけて予定されている第2期中期目標の自己点検評価・報告書作成です。第1期と比較した評価が問われています。教育や研究が高いレベルで維持されているか、さらに向上しているかが問われています。調査に関しましては、皆さまもご協力くださいますようお願いします。次回また新しいご報告を出来ればと思います。それでは、また。

IX Conabro 2013 – IX Congresso Brasileiro de Radiologia Odontológica

I Congreso de la Sociedad Venezolana de Radiología e Imagenología Dentomaxilofacial (SVRID)

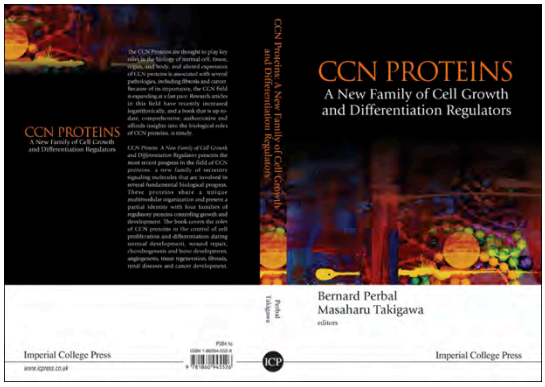
「口腔生化学分野退任のご挨拶とこれから～」

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科
口腔生化学分野　　滝川　正春

本年２月の日本歯科医学会会長賞授賞式後に撮影

本年３月をもって定年を迎えるにあたり一言ご挨拶申し上げます。私は平成６年４月に大阪大学から岡山大学歯学部口腔生化学講座教授として着任しました。以来２０年間、教育、研究、管理運営に携わり、それなりに職責を果たす事ができました。これも一重に岡山大学教職員ならびに学生の皆様方のご支援、ご指導、ご協力のお陰と、深く感謝しております。

岡大に着任後、新たな研究を立ち上げようと、内軟骨性骨化を全面的に促進する仮想因子としてエコジェニンを想定し、同因子の候補として *hcs24* 遺伝子をクローニングし、これが結合組織成長因子 CTGF 遺伝子と同じであったこと（現在両者は CCN2 と名前が統一されている）から、CCN2 の生理的機能の解明に全力を傾注し、そのエコジェニン作用の検証と組織再生因子リジェネリン作用の証明を行い、さらに CCN2 を含む CCN ファミリータンパク質全体の作用の分子機構の解析結果からシグナルコンダクターという新たな分子概念を提唱し、CCN ファミリータンパク質研究で岡大歯学部を世界の一大拠点にすることができました。その過程で、このテーマで、文部科学省基盤研究（S）を２度も獲得できましたが、これも、ひとえに教室員ならびに岡大歯学部の多くの共同研究者の方々との共同研究による多くの研究業績の裏打ちがあったからこそ採択されたものと感謝しております。基盤研究（S）は医・歯・薬学共通の土俵の上で審査されますが、過去、岡大医学系には基盤研究（S）の採択者が一人もおらず、岡大全体でも２度採択された者はいないことから、歯学系にとって大いに誇れることと思います。



世界で最初に出版された CCN ファミリータンパク質の本（パリ第７大学 B. Perbal 教授との編著）

私は平成 12-13、18-19 年度に学部長を務め、その際部局の統合という難局に遭遇しましたが、皆様方の協力により何とか乗り越えることができました。その際感じた事は、研究、教育、臨床のいずれをとっても、業績がいかに重要かということでした。業績があれば他の学系に respect されるし、文部科学省にもその存在価値を認めてもらえます。歯学系は、大学院は医・薬と、病院も医と統合されており、そのような大きな部局のなかにいる小さな系として絶えず存在意義を主張できる業績を挙げておかねば、いつ何時縮小を迫られないとも限りません。皆さん、教育・研究・臨床いずれにおいても一致団結し、一丸となって協力し、歯学系を盛り立てていただきたいと思います。

幸い、私、皆様方のご高配により、本年４月からは、歯学部先端領域研究センター所属の大学院医歯

薬学総合研究科教授（特任）として、研究を続行できることになりました。研究はもちろん、教育、若手研究者の育成、さらにはいままで培ってきたネットワークを生かしての国際交流や、産学官連携でも少しでも歯学系のお役に立つように、微力ながら尽力させていただくつもりですので、今後ともよろしくお願いいたします。

「就任のご挨拶」

歯科矯正学分野
上岡　寛

平成 26 年 2 月より、歯科矯正学分野の教授に就任致しました上岡寛です。徳島大学から岡山大学に参りまして、早いもので 15 年が立ちました。その間、山本照子教授（現東北大学）、山城隆教授（現大阪大学）のご指導のもと歯科矯正学の研究、教育、臨床に携わることができました。お世話になった先生方の後任として、引き続き教室を担当させて頂け大変嬉しく思います。これからもどうぞよろしくお願い申し上げます。

私は、徳島大学を平成元年に卒業しましたので、歯科医師としてのキャリアは、26 年目に入ったことになります。学生時代の私をご存知の方は少ないと思いますので、この機会に簡単にご紹介させて頂きます。

大学では、目立った成績もなく、語れるものは部活動くらいしかありません。高校生まで体育会系とは無縁の生活をしていましたので、基礎体力ほぼゼロのスタートでしたが、剣道部に入りました。続けるにつれて腕がどんどん太くなる現象に惚れ、６年間を全うすることができました。そして卒業までに三段を頂くことができ、継続することの大切さを学びました。在学中はいつも部員不足で、６年間の在籍期間中、最大部員数は４名でした。団体戦の登録もままならず、対戦成績では全く自慢できることはありませんでしたが、このメンバーのうち私を含み３名が現在歯学部の教授になっています。2 年下の阪井丘芳教授（大阪大学）、5 年下の石丸直澄教授（徳島大学）です。皆さん、それぞれの分野で、すでに大変ご活躍されている先生方です。学生時分には、学問のことなど話した記憶もないもの同士ですので、それぞれ違う分野に進んだ大学院時代に色々な出会いと転機があったのではないかと思います。今でも当時と同じような付き合いができているのを嬉しく思います。

学問と疎遠だった大学時代とは異なり、大学院には明確な意志を持って進学しました。学部生時代の反動でしょうか、「研究」という言葉に憧れをもっていました。「研究で留学」なんとかっこいい響き。そんな先輩に続きたいと思いました。そして、大学院を修了後、米国インディアナ大学で現在の研究の基礎となるバイオイメージングを学ぶことができました。科学的な真実は、人知を越えたところにありますが、精度の高い画像、動画からは誰もが共有できる事実を提供できます。その一枚、あるいは一秒の映像をとるためには、撮影にかかわるものの時間すべてが集約されていることを感じるようになりました。それは、構想であり、準備であり、忍耐であり、そして、失敗を許容することだと思います。

臨床、教育についても基本的には同じようなことがいえると思います。これからは、自分の夢を追いかけると同時に、若い先生の夢を叶えることのお手伝いをしていくことになります。そのような中で共に歩み、悩みを共感し、魅力ある先輩として教室を牽引して行きたいと思います。写真は、昨年 12 月に教室の皆がサプライズのお祝いをしてくれたときの写真です。私の教室作りの最初の大切な一枚です。

これからも皆様のご指導、ご鞭撻を賜りますよう、私共々歯科矯正学分野をどうぞよろしく

お願い申し上げます。

「着任のご挨拶」

口腔顎顔面外科学分野
志茂　剛

平成 25 年 9 月 1 日より口腔顎顔面外科学分野の准教授に着任させて頂きました志茂剛と申します。臨床におきましてはいつも先生方には大変お世話になっております。岡山大学第二口腔外科に入局したのは今から 20 年前に遡ります。大学院の面接試験で先代の松村智弘教授に「口腔外科は体力勝負ですから！」と援護して頂き無事入学，その言葉を信じ 20 代を口腔外科の臨床と口腔生化学の滝川正春教授の御指導の下，骨と血管新生の研究に没頭してきました。入局 3 年目の秋，現佐々木朗教授の米国骨代謝学会の発表に同行し，シアトル，その足で当科からペンシルバニア大学に留学中の大山和彦先生，同大のファカルティである小山英樹先生の研究室を訪れ，アメリカ生活を夢見るきっかけを頂きました。大学院卒業後，2 年間，吉備高原医療リハビリテーションセンターに勤務となり，開業に心迷う時期に滝川先生の「やり残した仕事はどうなっているんだ」というお言葉に背中を押され，再び休日には大学へ足を運び研究に打ち込む日々を送りました。その後佐々木先生，滝川先生に，小山英樹先生の最初のポスドクになるご縁を頂きました。ラボへの出勤初日，隣のラボのアメリカ人に「おまえはどんな研究をしていたんだ？」と聞かれ自分の論文を見せたところ，「この論文はおまえのだったのか」との返事に驚きました。この時「研究は世界とつながっているんだ」と初めて実感し，その後彼とは共同研究へと発展することとなりました。ポスドクであるにも関わらず，自由なテーマで研究をさせて頂いた小山先生，Pacifici 教授の寛容さには感謝に尽きません。その後佐々木先生が教授に決まり，臨床に復帰させて頂きました。2002 年に帰国後，同期はすでに顎変形症の骨切りを行っており，口腔外科臨床すべてにおいて目を覚まされました。これまで佐々木先生には悪性腫瘍手術を，西山明慶先生には顎変形症の骨切り術を各症例ごとにゼロから丁寧に御指導頂いたことには心より感謝しております。今後も「患者中心の医療」を目指し，患者様に安全でやさしい医療を提供することをモットーに，常に各専門学会より新たな医学知識の習得や医療技術の向上に自己研鑽し，岡山大学発展のため，臨床に従事いたす所存です。教育・研究面でも教室内で行った成果を治療に還元することを目指した translational research を進めて行くことを臨床口腔外科分野としての使命として考え，国際交流能力を備えた大学院生の育成を目指して参ります。

今後とも先生方のご指導，ご鞭撻を賜りますようどうぞよろしくお願い申し上げます。

「着任のご挨拶」

口腔機能解剖学分野
丸濵　功太郎

平成 25 年 4 月より大学院医歯薬学総合研究科口腔機能解剖学分野の助教に着任いたしました丸濵功太郎です。この場を借りて皆様にご挨拶申し上げます。

私は岡山大学歯学部を卒業後（23 期生）、岡山大学病院卒後臨床研修センターにて研修医を修了し、インプラント再生補綴学分野（旧第一補綴科）に大学院生として入局させていただきました。大学院時代には、口腔インプラント治療など補綴歯科診療に加え、顎関節症・口腔顔面痛み外来にて頭頸部の痛みに苦しまれる患者さんを診させていただく機会の中で基礎研究に興味を持ち、神経障害性疼痛の発症メカニズムの解析、そしてその新規治療法の開発に関わる研究をさせていただくなど、多くのことを学ばせていただき充実した大学院生活を送ることができました。

現在、これまでの「研究」「臨床」に加え、「教育」にも携わらせていただき、自身の非力さを日々痛感しながらも毎日新たな発見の連続と共に過ごしております。

研究に関しては、大学院時代からのテーマである神経障害性疼痛の発症メカニズムの解析に加え、知覚神経節また中枢神経系におけるクロストークや関連痛の発症メカニズムに関する研究を始めました。

教育に関しては、今年は 9 年ぶりに解剖実習に参加させていただきました。自身の学生時代を思い出し、学生さん達がこれから始まる臨床教育や臨床実習、そして近い将来歯科医師になることを想像しながら、少しでも貢献できればと考えております。

未熟な私ではありますが、今後も研究、教育等に精進するのはもちろんのこと、人との繋がりを大切にしながら日々研鑽を積みたいと思っております。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

「着任のご挨拶」

インプラント再生補綴学分野
大島　正充

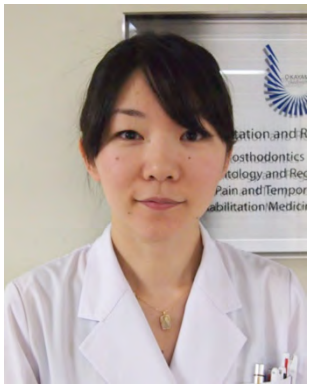
2013 年 10 月 1 日より、インプラント再生補綴学分野の助教に着任させていただきました、大島正充と申します。ご挨拶とともに簡単ではありますが、自己紹介をさせていただきます。私は、岡山大学歯学部（20 期生）を卒業した後、岡山大学大学院医歯薬学総合研究機構　顎口腔機能制御学分野（現在のインプラント再生補綴学分野）の窪木拓男教授のもとに入局を致しました。私は研修医制度のない最後の学年でしたので、右も左も分からない状態で「インプラント治療ができるようになりたい」という気持ちだけで入局したことを覚えております。

大学院生時代は、成長因子を用いた歯槽骨の再生研究に従事しており、非常に興味深く取り組んできました。当時は、マイクロ CT 技術が研究分野で使われるようになり、成長因子による骨梁構造の増加を 3D 画像で観察した時の興奮は今でも忘れられません。地方開業医の息子であることもあり、博士過程が終わったら実家を継ぐであろうと私自身も疑っておりませんでしたが、面白さが分かってしまった研究から離れることができず、大学院卒業後 2009 年 4 月から東京理科大学 総合研究機構・辻孝研究室に国内留学をさせていただきました。4 年半の留学期間でしたが，国内留学ということもあり言葉に困ることはないものの，ミーティングや書類作成など忙しいサラリーマンのようにバタバタ（充実？）した毎日を過ごさせていただきました。海外留学された先輩の先生方は,「留学中は論文を読む時間も十分あるし,アメリカ横断なんかも経験したし､色々と楽しいよ」と教えてくれましたが、そのような生活はどこにあったのでしょうか？しかしながら、4 年半の留学期間中は「歯の再生研究」を中心に従事しまして、東京理科大学の辻教授の御指導のもと、非常に多くの研鑽を積ませていただきました。

昨年 10 月からインプラント再生補綴学分野に着任し、臨床と教育に従事しておりますが、ブランクもありますので、新人の時のように謙虚に進めていきたいと思っています。また研究面では、これまでの経験を活かしながら、新たな医療技術・イノベーションを生み出すような研究開発、人材育成をしたいと思っております。大学教育や歯科医療は厳しい時代ではありますが、大学教員という責務を十分に果たせるように努力して参ります。最後になりましたが、先生方の御指導をいただけますと幸いに存じます。どうぞ宜しくお願いいたします。

「着任のご挨拶」

新医療研究開発センター
大野（木村）　彩



平成26年1月1日より岡山大学病院新医療研究開発センターの助教に着任いたしました。これまで旧姓を使用しておりましたため、「大野　彩」という名前ではぴんと来ない先生が多くいらっしゃると思いますが（私自身もぴんときておりませんが）、この度院内でも改姓させていただくことになりました。この場をお借りして、改めて皆様にご挨拶させていただきます。

私は平成17年に岡山大学を卒業後、インプラント再生補綴学分野に大学院生として入局しました。そして、臨床実習の時に感じた「本当に患者さんが喜ぶ治療、患者さんにとって良い治療ってなに？？」という疑問の答えを探して臨床研究を学び始め、大学院の4年間はQuality of Lifeをテーマに研究させていただきました。その後、平成20年からは大学院GP事業・医療系大学院高度臨床専門医養成コースの特別任用助教として、平成22年からはインプラント再生補綴学分野の助教として勤務してまいりました。その間、多くの診療や教育の現場を経験すると同時に、様々な臨床研究、疫学研究を実践できたことは私にとって毎日が学びの連続で、とても貴重な時間でした。

大学卒業後ずっと臨床・疫学研究に触れてきた私ですが、その中でとても強く感じるようになったことがあります。それは、これからの歯学には「どんな歯科医師でも同じように、質の高い医療が提供できること」「新規治療の開発が進むこと」「予防歯学の発展」の3つの軸が大切ではないかということです。

歯科治療には手技の巧みさを問うものが多く、歯科医師が病気を治すために個々の技術を磨くことに集中してきたことはごく当たり前のことと思います。私自身、補綴治療、口腔インプラント治療を専門にしており、自分の技術を高めることを目標にしてきました。しかしその一方で、本当に国民に貢献する医療を考えた時、目の前の歯科医師の知識や技術に依らず質の高い医療が受けられれば、より多くの患者さんが幸せになれるのではないだろうか、そのためには新しい治療概念を創りだすことが必要ではないだろうか、そしてそもそも病気にならなければ困ることもないのではないだろうか、という思いは強くなっていきました。これらを実現するためには、臨床研究・疫学研究によるエビデンスの創出、トランスレーショナルリサーチの実施が欠かせないと思います。

私は今回、新医療研究開発センターで臨床・疫学研究だけでなく、治験や臨床前試験、創薬、倫理委員会の実務に携わる機会をいただきました。これは臨床研究中核病院事業として、革新的な医薬品や医療機器の創出、難病や稀少疾患、小児疾患等を対象とした医師主導治験を中四国地域の基幹病院として実施することが中心的なミッションです。まだまだ未熟な私ですが、多くを吸収し、日本の医療が世界中に貢献できる日を目指したいです。そしていずれはこの経験を活かして3つの軸を実現し、歯学の発展に貢献できるよう邁進したいと思っております。引き続きご指導、ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

最後に、大学院一年生の時「臨床研究で学位は取れないよ」と多くの先輩に言われ、不安になっていた私をずっと励まし、ご指導くださった窪木拓男教授、荒川　光先生、一緒に研究を頑張り、支えてくれた同級生、医員、大学院生の皆さん、臨床・研究・教育と日々ご指導いただいたインプラント再生補綴学分野の先生方に深く感謝申し上げます。

「着任のご挨拶」

歯周病態学分野
下江　正幸

はじめまして，このたび 2013 年 4 月 1 日付けで歯周病態学分野・助教に任命されました下江正幸と申します。福岡歯科大学を卒業後，岡山大学病院・歯周科で 2 年間の研修医を経て，同大学院を卒業，その後医員を 1 年経験し，広島県三原市・興生総合病院の歯科医長を 1 年，国立療養所・邑久光明園で厚生労働技官を 1 年と，ここ最近は瀬戸内海周辺の職場を転々として参りました。

大学院時代は，歯周組織再生療法後の歯肉上皮のダウングロースの制御と題して，上皮細胞の強力な増殖抑制因子である TGB-bの下流の Smad2 という細胞内伝達分子の増減が歯肉上皮細胞においてどのような影響を及ぼしているのかを解明する研究（*Journal of Periodontal Research*, 2013）をしておりました。やや時間はかかりましたが，山本直史講師のお力添えをいただき形にすることが出来ました。

また，興生総合病院在職時に歯周病専門医を取得し，地域医療に少なからず貢献でき，邑久光明園では，入所者への歯科治療を中心に，園内の検査部と共同して臨床研究を行ったり，看護師・介護職員などへの園内研修を開催したりと，異なった環境で様々な経験を積むことができました。

高柴教室の門を叩いてまる 10 年が経過し，多くの諸先輩方のご指導の元，素晴らしい経験をさせて頂いて感謝しております。今後は，これまで経験させて頂いたことを後輩・学生へと伝えていくことができればと考えております。今後とも変わらぬご指導･ご鞭撻を賜りますよう，よろしくお願い申し上げます。

「着任のご挨拶」

咬合・有床義歯補綴学分野
川上滋央

2013 年 4 月 1 日付けで咬合・有床義歯補綴学分野の助教に着任させていただきました，川上滋央と申します。ご挨拶を兼ねて自己紹介をさせていただきたいと存じます。

私は 2008 年に岡山大学を 23 期生として卒業し，岡山大学病院卒後臨床研修センター歯科部門で 1 年間の研究を受けました。研修終了後，咬合・有床義歯補綴学分野に入局し，大学院生として診療・研究に励みました。

大学院では皆木教授，原准教授をはじめ多くの先生方のご指導の下，研究を行ってまいりました。研究は外側翼突筋の活動記録について行っておりましたが，大学院 3 年生の時には外側翼突筋をはじめとする咀嚼筋活動と顎顔面痛との関係について研究を行っている Prof. Chris Peck と Prof. Greg Murray (The University of Sydney) の下で学ぶ期間を与えていただき，1 か月間という短い間ではありましたが，視点を変えることができたという点で貴重な経験となりました。オーストラリア滞在中は十分なディスカッションをすることができない自分の英語力の低さを痛感いたしましたが，それもよい刺激となり，帰国後も英語学習に励んでおります（一向に上達はしておりませんが……）。

また，現在は日中や睡眠時のクレンチング習癖について研究しております。臨床においてクレンジング習癖が原因と思われる疼痛で悩む患者さんをよく目にします。このような一般開業医ではなかなか治療が難しい患者さんを治療することも大学職員として重要であると考えており，益々研究・診療に精進していきたいと考えております。

助教着任後は，学生の教育という仕事も行うようになり，学生時代には気づかなかった大変さを感じております。自分の学生時代には時には厳しく，時には優しくご指導いただきましたが，いざ自分が指導する立場になると厳しさも優しさも足りないと反省することが多いです。年々，歯科医師国家試験は合格率が下がっている中で教員としての責任の重さを感じますが，微力なりとも自分なりに貢献できるよう努めていきたいと考えております。

まだまだ未熟な私ですが，今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

「着任のご挨拶」

咬合・有床義歯補綴学分野
前田　直人

この度，平成 26 年 1 月より咬合・有床義歯補綴学分野の助教に着任いたしました．この場をお借りして，ご挨拶申し上げます．

私は，6 年前に鹿児島大学歯学部を卒業し，卒後臨床研修医として岡山大学に来ました．研修終了後は，興味があった補綴学についてもっと深く勉強したいと思い，咬合・有床義歯補綴学分野の大学院に進学しました．幸いに岡山大学は大学院に進学する人が多く，在学中は同期と切磋琢磨して，楽しく臨床や研究に取り組むことができました．また，口腔生理学の教室で，唾液分泌に関する基礎研究をさせていただき，研究の難しさや楽しさを知ることができました．苦しさも楽しさも全部含めて，大学院在学中は大変有意義な時間を過ごすことができたと思っています．

臨床や研究について私自身まだまだ勉強しなければならない立場でありながら，これからは教育にも携わっていかなければならないことに，不安と責任の重さを感じています．歯科医師としてのキャリアは 6 年と短いですが，これまでに得た知識や経験を学生や研修医の皆様に伝えられればと思います．また，自分自身も成長できるよう，謙虚さをもって 取り組んでいきたいと思っています．

これまでの私は，たくさんの良い出会いに恵まれていたと感じます．今後は，「臨床」，「研究」，「教育」を通して接する人たちに，少しでも良い出会いであったと感じてもらえるように一生懸命努力したいと思います．

まだまだ未熟で至らない点が多いと思います．今後とも皆様のご指導・ご鞭撻を賜りますよう，よろしくお願い申し上げます．

昨年，念願叶ってインドへ．ガンジス河で沐浴．

「着任のご挨拶」

歯科矯正学分野
住吉久美

平成 26 年 3 月 1 日付けで、岡山大学大学院医歯学総合研究科・歯科矯正学分野の助教として着任いたしました住吉久美と申します。この場をお借りしまして、皆様にご挨拶をかね自己紹介をさせて頂きます。私は、いにしえより栄えし町・大阪の堺にて生まれ育ちました。堺市は、岡山市の町並みと似通った点が多数あります。街中を路面電車が走り、河川敷には美しい桜が立ち並び、海岸への道のりも絶景です。岡山大学入学とともに岡山へと移り住みました後、ふるさとの面影を感じるためなのかなぜか心休まる岡山で、もう 10 年以上の月日を過ごしています。

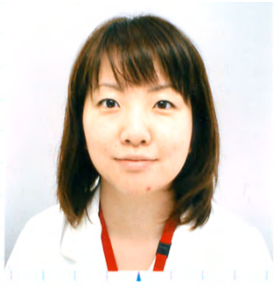
21 期生として岡山大学歯学部を卒業後は、同大学卒後研修医センターにて 1 年間研修医として勤務しました。同大学院矯正科へ入局後は、山城隆元教授（現大阪大学大学院歯学研究科　顎顔面口腔矯正学教室教授）、口腔生化学分野・滝川正春元教授（現先端領域研究センター教授）、口腔生化学分野・久保田聡准教授（現教授）ご指導の元、CCN ファミリー遺伝子発現調節機構および軟骨分化に関与するマイクロ RNA の解明に関する研究を行ってきました。研究の結果は、国内外多数の学会で発表させて頂き、本当に貴重な経験をすることができました。ご指導いただいた多くの先生方に、心から感謝しております。今後も、今まで学んだ知識・専門的技術を生かしさらなる研究を進める予定です。

私が矯正歯科医を志したのは、自分が矯正治療をして頂いた経験がきっかけとなっています。歯が骨の中を動き、みるみる治っていく過程に感動しながら毎月治療に通っていました。矯正歯科医として日々自分が治療を行う側になり、さらに教育・指導へ携わる立場となりましたが、矯正医としては半人前にも満たず、学ぶべきことが数多くあることを日々実感しています。初心忘るべからず、日々精進していきたいと思います。

今後とも一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

「着任のご挨拶」

小児歯科学分野
藤田一世



平成 25 年 6 月より岡山大学大学院医歯薬学総合研究科小児歯科学分野講師として着任いたしました。この場をお借りして、皆様にご挨拶を申し上げます。また、今回このようなご挨拶をさせて頂く機会を与えて頂きました歯系広報誌の編集委員長はじめ関係の皆様に深く感謝申し上げます。

私は、生まれも育ちも大阪であり、平成 14 年、大阪大学歯学部を卒業後、大阪大学大学院歯学研究科小児歯科学教室に大学院生として入局致しました。大学院時代は現岡山大学大学院医歯薬学総合研究科小児歯科学分野　仲野道代教授の指導のもと齲蝕病原性細菌 *Streptococcus mutans* の表層タンパクに関する研究を行いました。大学院修了後は、小児歯科学教室にて引き続き研究、臨床、および学部生および大学院生の教育に従事し、医員、助教を経て、現在に至ります。着任して、1 年が過ぎようとしています。当初は、初めての大阪以外での生活に不安もありましたが、気候や環境も大変良いところで住みやすく岡山での生活を楽しんでおります。

近年、小児の唾液中に存在する *S. mutans* 菌数は減少する傾向にあり、*S. mutans* が検出されない小児が増加しています。しかしながら、齲蝕の発生率はそれほど減少しておりません。現在、口腔内細菌において齲蝕原性を有している *S. mutans* 以外の菌について検討を行っています。特に乳酸菌に着目し、乳酸菌の生物学的特性について検討することにより、乳酸菌による齲蝕発生メカニズムや、バイオフィルム形成における乳酸菌と *S. mutans* の相互作用について研究を行う予定です。

臨床では、保護者の要望に答えられるような治療を目指しております。また、私は平成 21 年に小児歯科専門医を取得しており、その経験を毎日の診療に活かしていきたいと思っております。

最後になりましたが、これまでに学ばせて頂いたことや経験してきたことを活かし、研究と臨床、教育に日々精進していく所存でありますので今後とも御指導、御鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

「着任のご挨拶」

小児歯科
山﨑　由衛

この度、平成 25 年 8 月 1 日付けで岡山大学 大学病院小児歯科の助教に着任いたしました山﨑　由衛でございます。

私は、平成 19 年に松本歯科大学を卒業後、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科　社会環境生命科学専攻小児歯科学分野の大学院生となり、研究および小児歯科臨床を学ばせて頂きました。平成 25 年 3 月に博士課程を修了した後、このたびのお話をいただきました。

大学院では、犬由来 *Porphyromonas gulae* の線毛遺伝子多型と歯周病原性との関連を分子生物学的な手法を用いて研究に取り組んでまいりました。主な研究内容は、犬における各種歯周病原性細菌の分布を検討し、特に *P. gulae* の FimA タンパクの多様性に焦点をあて、歯周状態との関連を分析しました。また、犬とその飼い主における歯周病原細菌の分布パターンを分析後、犬とその飼い主との菌の伝播の可能性の検討を行い、以上の研究結果が学位論文となりました。今後はさらに、*P. gulae* における線毛タンパクをもちいた予防法の確立を目指す予定です。

臨床については、子どもの成長に重点を置き口腔内の成長をトータルで考えながら臨床に携わっていきたいと考えております。

今までは教育を受ける側の立場でしたが、これからは教える側としての難しさと重要性を感じております。経験も能力もまだまだ未熟な点も多いとは思いますが、今までご指導いただいた諸先生方の教えをもとに、臨床・研究・教育を模索しながら貢献していきたいと思います。末筆ながら、今後とも一層のご指導とご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

「転出のご挨拶」

大阪大学大学院歯学研究科　顎顔面口腔矯正学教室
山城　隆

岡山大学歯学部の皆様におかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。平成 25 年 4 月より大阪大学大学院歯学研究科　顎顔面口腔矯正学教室を担当しています。早いもので 1 年が過ぎようとしています。岡山大学歯学部、大学院医歯薬学総合研究科では多くの先生方に大変お世話になりました。これまでのご高配とご支援に対して、この場をお借りして御礼申し上げます。

私は大阪大学歯学部そして大学院歯学研究科へ進学後、平成 9 年、私の大学院の指導教員であった山本照子教授（現在、東北大学大学院教授）の下に助教として岡山大学に赴任しました。途中、平成 12 年からヘルシンキ大学へ留学した 2 年間と平成 17 年から大阪大学へ助教授として赴任した 2 年弱を除き、約 12 年間を岡山の地で過ごしました。平成 19 年より、歯科矯正学分野を担当するようになりましたが、優秀な医局員や同僚に囲まれて仕事ができたことは何よりです。

大阪大学歯学部附属病院では、この 4 月より口唇裂・口蓋裂・口腔顔面成育治療センターが立ち上がりました。これは診療科等の横断型のセンターという新たな試みで、国内外においても、最も大きな口唇口蓋裂センターになると思います。このような疾患の拠点センターとしての活躍も期待されるため、身が引き締まる思いです。治療の効率化を図るとともに、先進的医療の開発・導入を進め、各診療科の連携を密にするための工夫に日々画策しております。岡山大学で経験した口腔外科との顎変形症症例のセミナー、保存・補綴科等との連携セミナー、小児頭蓋顔面形成センター等における連携が、非常に役立っています。一方、私の研究テーマは岡山大学で教員になった後に学び発展させてきたものがほとんどです。分野間の垣根を越えてご指導ご支援をしてくださった多くの先生方に感謝を申し上げます。大阪大学におきましても、これまで培ってきた顎、顔面の形成に関わる基礎研究を展開していきたいと思います。

岡山大学の歯科矯正学分野も長年一緒に仕事をしてきた上岡寛先生が教授になられました。これまで、大阪大学と岡山大学を往復してきたキャリアを生かして、両校が益々発展するよう努力していきたいと思います。今後ともよろしくお願い申し上げます。

「転出の御挨拶」

大阪大学大学院歯学研究科　口腔分化発育情報学講座
顎顔面口腔矯正学教室
伊藤　慎将

岡山大学歯学部の皆様方におかれましては、益々ご健勝のことと心よりお慶び申し上げます。

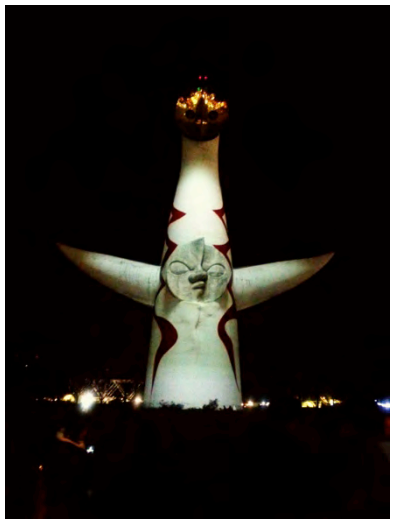
去る平成 25 年 12 月、私は、大阪大学大学院歯学研究科・顎顔面口腔矯正学教室（主任：山城隆教授）の助教を拝命し、過日赴任いたしました。前号の歯学だよりでは、岡山大学での助教着任の御挨拶をさせていただいたばかりでしたが、今回はこうして転出の御挨拶をさせていただくこととなりました。

岡山大学在任中におきましては、本当に多くの先生方に大変お世話になりました。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

私は、岡山大学歯学部 21 期生であり、平成 18 年に卒業後、１年間研修歯科医として同附属病院に在籍しました。その後、大学院へ進学し、歯科矯正学の臨床を学びながら、口腔生化学分野で研究のお世話になり、数多くの経験をさせていただきました。その後平成 24 年 5 月からは歯科矯正学分野の助教として、約 1 年半と短い期間ではありましたが、在任させていただきました。

その間、学部教育では１回生のチュートリアル教育プログラムに、チューターとして参加しました。かつて私が同じく１回生だった時、最初のチュートリアルの記憶は今でも鮮明です。受験勉強に順応してきた自分たちに、ひとつのテーマに対して、仮説を立て、情報を収集し、それを吟味、考察し、結論に至るという学習の基礎を体験させてくれたのを覚えています。そのチューターをまさか自分が担当して、第一講義室に偉そうな顔をして座っているというのが、自分としては違和感がありつつ、とても感慨深いものがありました。初めて大学で受ける専門教育が、学生に与えるインパクトが多大であることは自分の経験で明らかでしたので、岡山大学歯学部生として、次世代を担う学生たちに、少しでも意義深い経験として記憶してもらえるように努めました。教員としての経験はまだまだ浅いものではありますが、新天地でも周囲の人々に少しでも寄り添えるような目線を持ちながら、臨床、教育、研究に携われればと思っています。

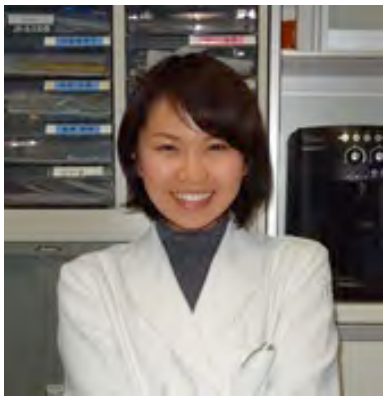
学部学生時代を含めると 14 年間、岡山大学でお世話になりました。当たり前に思っていた環境が、失って初めてその有難みに気付かされるというのは、幾重もの時代に渡って語り継がれているもはや世の常ではあるのですが、やはり、そうなのでした。大阪は吹田の丘の上から、岡山のことを忘れる日など、ありません。今まで自分が本当に恵まれた環境で、好き勝手できていたのだなぁと、ことある毎に痛感しています。そして今回こうして、大阪大学への赴任の機会を与えて頂いたことにも、山城隆教授、滝川正春教授をはじめ、多くの諸先生方に心から感謝するとともに、岡山大学の卒業生として、その名に恥じぬ様これからも努力精進していく所存でございます。



今後とも、何卒一層の変わらぬ御指導、御鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。また、末筆ながら、岡山大学の皆様方の、これからの御発展ならびに御健康と御多幸をお祈り申し上げますとともに、転出の御挨拶といたします。

「阿波の国からご挨拶と近況報告」

徳島大学病院　歯科第二補綴科
上枝麻友



22 期生の上枝麻友と申します。2013 年 12 月末に岡山大学病院を退職し、縁あって、2014 年 1 月から徳島大学病院歯科第二補綴科（松香芳三教授）にて働いております。

思い返せば、大学入学と同時に岡山で暮らし始めて以降、大学院卒後 2 年まで 13 年近く岡山に住んでいたことになります。転勤族の娘であった私にとって、これは最長記録です。卒後研修終了後、インプラント再生補綴学分野に大学院生として入局し、診療・研究・教育に携わり、多くのことを学びました。岡山大学病院在籍期間中にたくさんの先生方にお会いし、ご指導いただいたことは私の宝物です。この場をお借りして、お世話になった皆様に御礼申し上げます。

さて、まだ徳島に来て 3 ヶ月ほどですが、こちらの様子を少しご紹介します。徳島市は眉山という山が中心に位置しており、吉野川をはじめとする多くの川に囲まれた、自然豊かなところです。400 年の歴史をもつ阿波踊りは、毎年 8 月 12 日から 15 日まで 4 日間開催されます。約 130 万人の見物客、約 10 万人の踊り子が繰り出し、期間中は街全体が踊りの渦に巻き込まれます。大学病院内にも連と呼ばれる踊り子グループが診療科や学部ごとにあり、阿波踊り開催日にあわせて外来待合室で院内阿波踊りが開催されるそうです。

徳島大学病院は徳島駅の少し西側に位置する蔵本キャンパスにあります。キャンパス内には医学・歯学・薬学・栄養学・保健学にまたがる医療系 3 学部 7 学科と 5 大学院があり、多職種の医療人と研究者が行き交っています。隣接する徳島県立中央病院との間には医療従事者や患者が自由に行き来できる連絡ブリッジがあり、県内医療の拠点として整備されています。歯科においても新診療棟への移転や研究棟の改装が決まっており、新しく生まれ変わろうとしています。歯学部の特長としては、臨床実習において通常の診療に加えて、患者さんのブリッジや義歯を作製する技工作業にも力を入れていることが挙げられます。技工室では学生と教員、あるいは歯科技工士が一緒になって症例と向き合う姿が良く見られます。

同じ大学病院とはいっても、岡山大学病院とはいろいろ異なる部分があり、初めのころはほぼ毎日小さなカルチャーショックに遭遇していました。少し戸惑うこともありますが、これも新鮮な経験です。

こうして新しい環境に身を置いて、岡山で学んだことが自分の大切な基礎となっていることを改めて認識しました。この基礎の上に、さらに徳島での経験を積み上げて、自分自身のステップアップにつなげていきたいと考えております。

最後になりましたが、今回ご挨拶の機会を与えてくださった「歯学だより」編集委員の先生方に御礼申し上げます。また、岡山大学歯学部の皆様のますますのご健勝とご多幸を心よりお祈りいたします。

「転任のご挨拶」

愛知学院大学歯学部　口腔衛生学講座
入江　浩一郎

岡山大学歯学部の皆様におかれましては益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。平成25年12月１日付で､愛知学院大学歯学部口腔衛生学講座の講師として転任することになりました入江　浩一郎です。これまで多くの先生方に大変お世話になりました。この場をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございました。

前年度の歯学便りでは海外からの便りを書かせていただき、今年は転出のご挨拶を書くとは一年前には想像もできなかったことと思います。私は21期生であり、臨床研修を京都大学病院歯科口腔外科にて終了後、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科予防歯科学分野に大学院として進学しました。卒業後、岡山大学病院予防歯科の医員を経てワシントン大学歯学部歯周病学講座にて研究留学後､現在に至ります。振り返りますと大学を卒業後、色々と点々としているなと実感しています。そしてどの場所でも新たな発見や経験をさせていただき恵まれていると感謝しています。人を成長させるのはやはり人との出会いでしょうか。様々な背景をもった方と接するのは非常に刺激になりますし、頑張ろうという気持ちにもなります。御陰さまで、新しい環境での順応力とコミュニケーション能力が付いたのではないかと思っています。

さて、私が赴任しました愛知学院大学は、東海地区唯一の歯学部として、また歯学部附属病院は中部地区歯科医療の拠点としての役割を果たしています。所属しています講座は、去年の４月に九州大学から赴任された新教授のもと、新体制に向けて変化をしている真っ最中です。私学独特のしきたり等に、お互いに戸惑うことがありますが、岡大スピリッツを忘れず、柔軟に対応し良い医局を作れるよう教授をサポートできればと思っています。また４月からは総合歯科で研修医の指導もすることになり、教育等に占める割合が増えるかと思いますが、なるべく時間を作って研究も進めていこうと思います。岡山大学での臨床経験や大学院で得た研究に対する姿勢をもとに、教育・臨床・研究に邁進したいと思います。

名古屋という見知らぬ土地で、一からスタートするのは若干不安もありますが、お声を掛けていただきました、岡山大学森田教授のご期待に応えられるように責務を果たそうと思います。また育てていただきました予防歯科の先生方に対する御恩を忘れず、岡山大学歯学部の同窓生としての誇りをもって新天地で頑張っていこうと思います。是非学会やセミナー等で名古屋に来られる際は、お声を掛けてください。名古屋めしをリサーチしていますので。皆様の今後の益々のご発展とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

（医局の歓送会）

（愛知学院大学歯学部付属病院）

「第 3 回岡山医療教育・研究国際シンポジウム」

インプラント再生補綴学分野
縄稚久美子

平成 25 年 9 月 22 日（日），23 日（月），「第３回岡山医療教育・研究国際シンポジウム」を開催しました。

カナダのトロント大学，台湾の台北医学大学，ブラジルのサンパウロ大学，タイのチュラロンコン大学，マヒドン大学，マレーシア大学，モンゴル大学，バングラディッシュのサフェナ女子歯科大学，中国の中国医科大学，大連医科大学，香港大学，インドネシアのハサヌディン大学，韓国のソウル大学，シンガポール大学，ベトナムのハノイ大学，ハイフォン医科大学，アメリカのルイジアナ州立大学といった 10 カ国以上の大学から歯学部長クラスの要人が来岡されるということで，準備段階から大変緊張感がありました。

（シンポジウムの内容の詳細は http://www.hsc.okayama-u.ac.jp/mdps/event_750.html より御覧になれます）

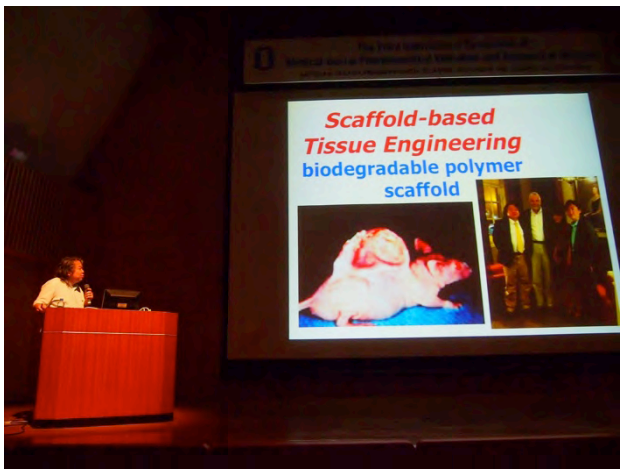
初日の 22 日は第 55 回歯科基礎医学会学術大会・総会との合同企画でトロント大学 Haas 教授，ソウル大学 Lee 教授，シンガポール大学 CAO 准教授，ルイジアナ州立大学 Gremillion 教授の 4 名の先生に岡山コンベンションセンターで講義をしていただいた後，岡山大学歯学部内で，来訪されている各大学の紹介，およびや岡山大学病院の新しい手術室等の見学ツアー（左写真）などを行いました．その後岡山国際ホテルでの懇親会には日本各地の歯学部から参加者もあり大変盛り上がりました．

翌日 23 日は歯学教育における国際認証評価の現状と戦略について，荒木孝二教授（東京医科歯科大学）から，その後，歯学教育の質保証と医科歯科連携教育について村田善則先生（文部科学省　医学教育課長（現文部科学省 科学技術・学術政策局 科学技術・学術総括官））からお話を聞きました（右写真）．村田先生ご本人が来てくださることは岡山大学にとっても大変光栄なことです．予定が決まってからは各部署で本当に大騒ぎでした．

その後医科歯科連携の実際として，まずは周術期管理センター・医師の立場から佐藤健治准教授（岡山大学病院　麻酔科・蘇生科／周術期管理センター），歯科医師の立場から曽我賢彦准教授（岡山大学病院　医療支援歯科治療部）に現在の役割や教育プログラム等をお示しいただきました．

続いて超高齢化社会のまっただ中にある日本が積極的に関わっている在宅介護歯科医療教育について，宮脇卓也教授（岡山大学病院　副病院長）には，岡山大学歯学部の教育システムや現在開発中の教育用ハード（左写真）をご説明いただき，菊谷　武教授（日本歯科大学）には，在宅介護支援が出来る歯科医師を教育する為のノウハウをお話しいただきました．来訪されている各国の先生方は興味深く写真を撮ったり動画を撮られたりしながらとても熱心に聞いておられたのが印象的でした．

歯学部長昼食会議は，イスラム教徒の先生方にあわせ，皆でハラルフードの昼食をとり交流を深めたり，岡山大学歯学部各分野の研究内容を示したポスターや，国内企業の機器の展示等をフロアで見ていただいたり，ディスカッションする機会を設けました（右写真）．午後からの講義は岡山大学が誇る世界レベルの研究の紹介として，高柴正悟教授（歯周病態学），仲野道代教授（小児歯科学），榎本秀一教授（薬学部　医薬品機能分析学）にお話をいただいた後，国内の医療を支える新技術について大和雅之教授（東京女子医科大学），谷口正輝教授（大阪大学），野中茂紀准教授（基礎生物学研究所）（右写真）にご紹介をいただきました．



毎回なのですが，文化の違うお客様をお迎えするにあたり，先生方のスケジュール等を出来るだけ把握し，よりよい“おもてなし”が出来るように考えますが，前日からいやな顔一つせずすすんでお客様のアテンドをかって出ていただいた諸先生方には大変お世話になりました。

この場を借りて心より御礼申し上げます。

「第５５回歯科基礎医学会学術大会・総会を終えて」

第５５回歯科基礎医学会準備委員長、口腔生理学分野
松尾龍二

特別講演の Thesleff 教授

滝川会頭から Thesleff 教授への感謝状の贈呈

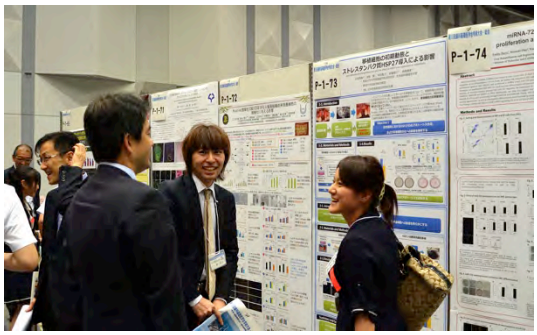
特別講演の Olsen 教授

平成２５年９月２０～２２日に岡山大学歯学部が主催して第５５回歯科基礎医学会を岡山コンベンションセンターで開催しました。ご協力頂いた先生や学生の皆さんには深くお礼申し上げます。

歯科基礎医学会は歯科界の基礎医学を網羅する最も大きな学会です。しかし近年、学生数や教員数の削減の影響により、会員数は最盛期の約３千人から約２千人に減少しています。その様な状況下で千人を越える参加者がありました。これは東北地方の大震災の影響により昨年度開催された奥羽大学での参加者が少なかったことへの反動、滝川大会頭（口腔生化学）のご努力や皆さんのご協力によるところが大きいと思われます。また会場が新幹線の駅から徒歩数分であったことも見逃せません。

多数の参加者を迎え、様々な企画を催しました。Irma Thesleff 教授と Bjorn Olsen 教授による特別講演、日本学術会議主催のシンポジウム、公募シンポジウム、岡山大学主催のシンポジウム、サテライトシンポジウム、ランチョンセミナーなどです。また同時期に開催された歯学部主催の第３回国際シンポジウムに関連したシンポジウムも行なわれました。これらの準備には滝川先生や実行委員長の久保田准教授には大変なご苦労がありました。しかし準備委員長の私としては、９月２０日が来ると、不思議なことに心はすでに終わったという感じになり、ただただ受付で状況を見守ることしか出来ませんでした。学会期間中は、むしろ滝川先生と久保田先生は大変だったと思います。いくつかの不測の事態もありましたが、何とか切り抜けられたと思います。

この学会を通して感じたことの一つは、法人化の動きです。恐らく学会員による学会員のための学会は、今回が最後だったでしょう。今後は徐々に法人に移行し、社会貢献の必要が求められ、学会主導の調査・研究も行われるでしょう。そこで問題になるのが人材不足です。すでに他の分野では、人材不足や会員数の確保のために（名目は学会員に有益な学会を目指すために）、若手研究者の育



Poster 会場の風景

滝川会頭と筆者への感謝状の贈呈
（左：筆者、中央：滝川先生、
右：大浦歯科基礎医学会理事長）

成・教育・研究の協力や指導も行なう学会が誕生しています。そこまで切実な状況であり、今後の岡山大学歯学部においても同様な問題が発生すると思われます。今回の歯科基礎医学会のメインテーマは「未来の歯科医療を拓く歯科基礎医学」でした。そして歯科医療と歯科基礎医学を繋ぐ架橋の象徴として、瀬戸大橋の写真を配したポスターを作成しました。今後も、橋を架けられるだけの基礎医学の力を確保・発展させていく必要があります。皆さんにもぜひ基礎医学にも目を向けて頂きたいと思います。

岡山大学歯学部は幸いなことに、一致団結する気風があります。また岡山は巨大都市化せずに良い意味でコンパクトであり、大学や学会場も新幹線の駅から数分の所にあります。岡山大学の利点はたくさんあると思います。利点を生かし共に発展していきましょう。

「沖縄県心身障害児（者）全身麻酔下歯科治療事業への参加」

歯科麻酔・特別支援歯学分野
友安弓子

この度、平成 25 年度前期沖縄県重度心身障害者全身麻酔下歯科治療事業に従事させていただきましたのでご報告させて頂きます。

沖縄県は隣県とのアクセスが悪く、患者の紹介も困難ということより、あらゆる障害者の治療を県内で完結させる必要があります。昭和 50 年障害者に対する歯科保健活動の普及、啓発のため、「沖縄県歯科医師会立口腔衛生センター歯科診療所」が開設されましたが、薬物を用いた行動調整を行う環境は整っていませんでした。そのため、昭和 54 年より医師派遣制度を導入し、厚生労働省と沖縄県との協力で前期（沖縄本島）と後期（離島）の毎年２回、沖縄県内の病院に出向いて心身障害児（者）に対して全身麻酔下で歯科治療を行うといったこの事業が開始されました。派遣医師は治療を担当する治療医・治療指導医、そして麻酔を担当する歯科麻酔医および歯科麻酔指導医の 4 名です。私は日本歯科麻酔学会の推薦を受け、前期日程の６月から約一か月間、名護市にある県立北部病院にて、23 名の患者様の麻酔担当医として携わらせていただきました。

当大学の宮脇卓也教授よりこの事業に参加してみないかと打診していただいた際、沖縄で歯科麻酔科医としての仕事ができると思い、「行きたいです！」と即答致しました。

岡山大学からは初めての事業参加で、右も左も分からない状態でしたので、派遣が決定した後も沖縄県福祉保健部や沖縄県歯科医師会の方々にお任せして、のんびりと構えておりました。事業開始前一週間を切った頃、速達で患者様の検査結果や詳細情報が送られてきて、「確認して追加の指示があればください」と言われ、慌てて 28 名分のデータを確認し、そのリスクの高さと責任の重さを認識し始めました。そして派遣当日、この事業が昭和 54 年から行われていると知り、また分厚い台帳に記載されている歴代の著名な先生方のお名前を拝見して、その歴史と業績の重みを再認識致しました。

準備、術前打ち合わせはタイトなスケジュールとハードな内容で、不安になりましたが、沖縄県歯科医師会の先生や衛生士さんが的確に誘導してくださり、敷かれたレールの上をただ走ったような感じでした。麻酔指導医の宮脇卓也教授や東京慈恵会医科大学歯科・口腔外科准教授の林勝彦先生が来られる第一週には、リスクの高い患者様や処置内容がハイレベルな患者さんを厳選して予定を組みました。実際に慣れない環境で麻酔をするのは不安がありましたが、指導医の先生方がいてくださったおかげで、

安全かつスムーズに治療を終えることができました。

指導医の先生方が帰任された後も、我々担当医 2 名と沖縄県歯科医師会の衛生士さん 2 名の４名で日々業務とこなして行きました。治療についてディスカッションをしたり、時には楽しい話で盛り上がったり、居心地良く過ごすことができました。最後まで重度の症例が続きましたが、事故なく、無事事業を終えられたことに安堵しております。

また事業に携わった時間だけでなく、合間を縫って駆け回った沖縄の各地と美味しい料理、そして何度も美味しい地元のお店に連れて行ってくださった沖縄県の先生と過ごした時間、治療担当医である秋山浩之先生と食事をしたりカヌー体験をしたことなども含めて、本当に楽しく有意義な１か月となりました。

最後になりましたが、このような機会を与えていただきましたことに感謝申し上げます。また、お世話になった沖縄県歯科医師会の先生方をはじめ、東京慈恵会医科大学准教授の林勝彦先生、秋山浩之先生、当大学の宮脇卓也教授、県福祉保健部の方々など多くの関係者の皆様に改めて厚く御礼申し上げます。

「岡山大学病院　頭頸部がんセンター　歯科診療チーム 楷の木賞（病院長賞）受賞」

口腔外科再建系
岡山大学病院　頭頸部がんセンター　センター長補佐
水川展吉

岡山大学病院　頭頸部がんセンターは、医学部形成外科の木股敬裕教授が発案し、２０１１年に木股敬裕教授、耳鼻咽喉・頭頸部外科（耳鼻科）の西﨑和則教授、私、水川の３人が、槇野博史岡山大学病院長に頭頸部がんセンター設立要望書を提出し、紆余曲折を経て、２０１２年４月に岡山大学病院にオープンいたしました。医科、歯科、看護、メディカルスタッフ部門を連携した国立大学病院としては、日本初の組織となります。センター長は、木股敬裕教授、医系副センター長は、耳鼻科の小野田友男助教、歯系副センター長は、歯科放射線・口腔診断科の浅海淳一教授が、それぞれ就任されました。また、センター長直属のポストで、事務との折衝や広報を担当するセンター長補佐は、私が拝命し、病棟の看護師長は、西１０病棟の大前雅代師長の兼任が決まりました。頭頸部がんは、鎖骨から上で脳、脊髄、眼を除くがんの総称であり、口腔がん、咽頭がん、喉頭がん、副鼻腔のがんなどが対象となります。この領域のがんは、がんの術後や放射線治療後に審美障害や機能障害をきたすことも多く、医科、歯科、看護、リハビリなどのメディカルスタッフとの連携は不可欠であります。

ここで、頭頸部がんセンターのことについて少し説明させてください。メインの医系診療科は、耳鼻科、形成外科、放射線科ですが、病理診断科、消化器内科、腫瘍センター、消化管外科、脳神経外科、麻酔科・蘇生科（ペインセンター）、緩和支持医療科、精神科神経科などとの連携も必要不可欠です。また、歯系においてメインとなるのは、顎口腔再建外科（口腔外科再建系のことで、頭頸部がんセンターでは、この名称を用いる）、医療支援歯科治療部、咬合・義歯補綴科、むし歯科、歯科放射線・口腔診断科、予防歯科です。看護部のメインは、西１０病棟および耳鼻科外来ですが、がんに関わる専門職の看護師および、形成外科外来、口腔外科外来の看護師にも大変お世話になっております。メディカルスタッフは、薬剤師、言語聴覚士、放射線技師、歯科技工士、歯科衛生士、ソーシャルワーカー、管理栄養士が関連部門となります。このセンターの特徴は、いわゆる縦割り組織でなく、診療科や診療部門の横割り組織が特徴です。毎週１回、水曜日の午後５時半から多職種の頭頸部がんキャンサーボードが開かれ、参加は誰でも自由ですし、発言も自由です。治療法について、手術（再建を含む）か放射線治療かディスカッションし、手術した症例は、医学部病理部の柳井広之教授がスライドで切除断端の腫瘍細胞の有無やリンパ節転移について説明してくれます。

現在、患者さんは、中国、四国地方は当然のことながら、インターネットで検索して、北海道、九州、名古屋、大阪などから来院し、治療を受けるようになりました。

さて、本題である頭頸部がんセンター歯科診療チームのお話です。まず、頭頸部がんセンターの患者さんは、すべて耳鼻咽喉・頭頸部外科を受診していただき、センター登録します。そして、ほとんどの患者さんは、歯科的介入が必要であるため、頭頸部がんセンターにおける医科から歯科の窓口である口腔外科再建系（顎口腔再建外科）に紹介されます。紹介状の文面は、口腔ケア依頼が多いですが、それは一部にすぎません。まずパノラマ撮影を行い、齲蝕、歯周病、インプラントなどのチェック、保存不可能な歯、保存補綴治療の必要性をチェックします。口腔ケアは全例必要です。手術で顎骨のプレート

補強や顎骨再建、抜歯が必要な場合は、当科も手術に加わり、3D モデル、プレート、皮弁咬傷防止用シーネの作成を前もって準備します。また放射線治療となった場合には、口腔内有害事象（口内炎、口腔乾燥症、開口障害、顎骨壊死など）の対策にあたる必要があります。従って現場での必要性および重要度の観点から、がん患者の治療（口腔がん）を自ら行った経験がある口腔外科再建系（顎口腔再建外科）が、センターの歯科の窓口であることが患者さんにとって非常に有益であると私自身は、考えております。センターにおける当科の窓口代表は、私ですが、私が不在時は、武田斉子医員が担当し、後日、私に報告してくれます。

また、口腔外科再建系から、口腔ケア（医療歯科支援治療部：山中玲子助教、予防歯科：丸山貴之助教、横井　彩医員、志茂加代子歯科衛生士）、齲蝕治療（むし歯科：田中久美子助教）、義歯および顎補綴（咬合・義歯補綴科、西川悟郎講師）、腫瘍の顎骨浸潤範囲や舌癌の腫瘍の厚み測定（歯科放射線科、柳　文修講師）をそれぞれ必要に応じ紹介します。すべて現場の代表者が明確に決まっており、患者さんおよび医科の先生方から大変好評を得ております。また 3D モデルやシーネ関連は、歯科技工士の協力が必要不可欠で竹内哲男歯科技工士長および当院歯科技工士が夜遅くてもまた、無理なお願いも聞いていただき、実際の臨床現場では、大変役立っております。また、医科および病棟などの看護師から歯科への要望があれば、私の方へ連絡が入り、私から各歯科担当者へ連絡させていただき、例外はありますが、通常、電話１本で当日に対処できる体制をとっております。現在、われわれが目指すのは、米国の MD アンダーソンがんセンターのようなものでしょうか。

上記のように頭頸部がんセンターは、現場の実組織であり、ホームページ（http://www.okayama-u.ac.jp/user/ohnccpky/index.html）にも掲載されておりますが、木股敬裕センター長の理念である患者さんのための医療の実践にあります。それ以外の雑念がほとんどないことが当センターの魅力です。また当センターは、社会貢献活動として市民公開講座や勉強会を開催しております。第１回市民公開講座は、国立がん研究センター東病院名誉院長で、寛仁親王の主治医であられた海老原　敏先生に、平成２５年９月１５日に岡山コンベンションセンターでご講演いただき、２００名予定の会場で、一般市民２８５名、スタッフをいれると３２２名の大盛況となり、大いに反響があり、山陽新聞には２回、記事として掲載されました（大会長：木股敬裕センター長、準備委員長：水川展吉、ポスター：武田斉子医員および松本洋助教）。

今回、木股敬裕センター長、森田学歯系副病院長、浅海淳一教授（歯系副センター長）のご推薦により、平成２６年１月７日、槇野博史病院長より、頭頸部がんセンター歯科診療チームに、楷の木賞（病院長賞）が授与されました。これは、頭頸部がんセンターにおける歯科的貢献および市民公開講座への準備を含めた貢献等が大きく評価されたものと思われます。

しかし、ここで忘れてはならないことは、センターで最も多忙で責任のある部門は、歯科部門ではなく医科部門であり、私自身、その医療姿勢に大変尊敬申しあげております。また看護部門、メディカルスタッフ部門の献身的な努力なくして現在の頭頸部がんセンターはありません。

最後に槇野博史岡山大学病院長、木股敬裕頭頸部がんセンター長、西﨑和則教授、森田学歯系副病院長、小野田友男医系副センター長、松本洋先生（形成外科）、頭頸部がんセンターの全スタッフ、協力者に感謝申しあげ、この稿を終えたいと思います。ありがとうございました。

「岡山大学若手トップリサーチャー研究奨励賞」を受賞して

予防歯科
江國　大輔

この度,岡山大学若手トップリサーチャー研究奨励賞を頂くことになり,大変光栄に感じております。本賞は国際的に活躍できる40歳以下の若手研究者の育成を図るため平成19年度に創設されたものです。本年度は1名のみの選出で、12倍という競争率の中で選ばれたことは感慨深いものがあります。歯学部では初めてであり、歯周病の予防に関する基礎的研究を中心とした動物モデルの開発やヒトへの応用についての研究が高く評価されたということで、歯学の重要性が役員の皆様にも深くご理解いただけたものと認識しております。

学長室で表彰された後、ある理事の方から、この賞は新人賞みたいなものだと言われました。研究を始めてから 16 年が経ちますが、この言葉を聞いて、まだまだひとつの通過点に過ぎないのだなと心新たな気持ちになりました。初心を忘れることなく、より一層人々のために研究をするべく研鑽しなければならないとあらためて感じております。

さて、今後も本賞を受賞するような若手研究者が歯学部から選出されることを期待しております。私自身は、前山本龍生講師の尽力でカナダに 1 年間留学することができました。4 つの論文を作製でき、今でも共同研究を続けております。帰国後も、ここでの経験が日々の研究に活かされております。また、英語を好きになることができました。こうした経験から、ぜひ若い先生方には、海外に留学して、活発な研究活動をしてもらいたいと思います。残念ながら、教員の場合は、歯学部では一度退職しなければなりません。他大学歯学部や岡山大学の他学部のように、大学に籍を残したまま現地で活躍できる制度を再開するように切に願っております。大学院生の場合は、留学のための資金確保が課題になります。競争的資金の獲得だけではなく、基金の設立も有効な方法かもしれません。

本当の意味のグローバル化は、外国人教員を雇用することや、日本人が英語で学生を教育することだけではないと信じております。気軽に海外に留学でき、英語力を身に着け（英語圏に生活してこそ得られる能力があると感じます)、そこで得たものを大学に還元するということも大学の国際力を高める手法のひとつと確信しております。

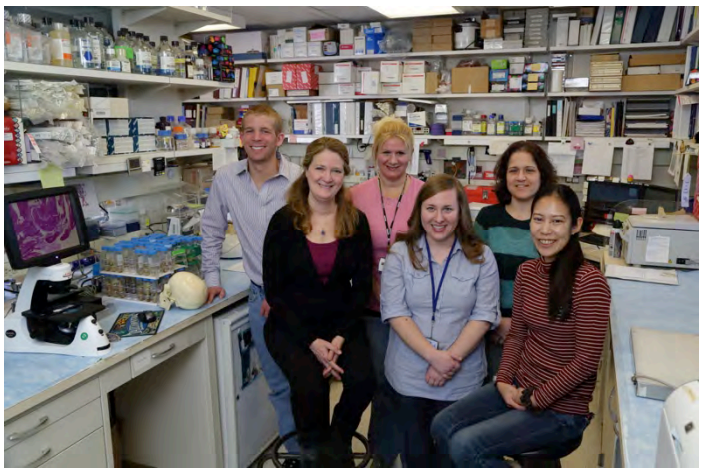
最後に，受賞にあたり，日々お世話になっている関係者の皆様には，この場をお借りして心よりお礼申し上げます。この素晴らしい賞は僕一人の力では到底得られませんでした。研究成果は、多くの方の協力のもと成り立っています。共同著者だけではありません。皆様に支えられて成し遂げられた偉業と理解しております。ご指導頂きました渡邊名誉教授・森田学教授をはじめ，多くの先生方に深謝致します。

「NIH留学記」

インプラント再生補綴学分野
前田あずさ

岡山大学のみなさま，こんにちは．現在，私はアメリカ合衆国メリーランド州にある国立衛生研究所(National Institutes of Health: NIH)に留学しています．NIHへはこれまでにも多くの先生方が歯学部から留学されているのでご存知の方も多いと思いますが，簡単に説明しますと，NIHは日本の厚生労働省に当たる保健福祉省(Department of Health and Human Services; HHS)に属する，生命科学分野を中心とした研究機関です．並列する機関には食品や医薬品，化粧品などの認可に関わるFDA (食品医薬品局)，世界のどこかで感染症が流行したときに名前を耳にするCDC (疾病予防管理センター) などがあります. そのNIHには専門分野によって分けられた20の研究機関(Institute)と7つのセンター(病院など)が存在しますが，私が現在お世話になっているDr. Marian YoungのラボはNational Institute of Dental and Craniofacial Research; NIDCRに所属しています．NIDCRはその名前に示されるように歯科・頭蓋顔面領域の研究を中心に行っている研究所です．

このNIHの特徴を一言で表すならば「多国籍」でしょうか．数年前の報告によると多いところから中国(20%)，インド(13%)，日本(9%)と続き，90以上の国からの研究者が集まっているようです．そして，様々な分野の専門家が身近にいるため，研究に行き詰まった時には気軽に相談できる人がいたり，共同研究がしやすいこと，また，世界各国からサイエンスの最先端を行く研究者はもちろん，他分野の著名人を招いた講演が多いのもNIHならではだと思います．研究以外でも同僚との関わりの中で他国の文化に触れる機会が多く，いろいろな面で刺激の多い生活を送ってきました．

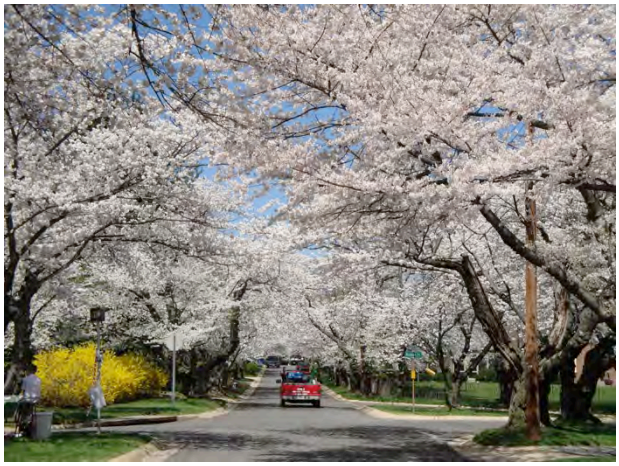


そんな私は2005年に長崎大学歯学部の20期生として卒業後，大学院生として顎口腔機能制御学分野(現インプラント再生補綴学分野)に入局しました．余談になりますが，長崎大学と岡山大学の歯学部は同年に設立されたので，岡山大学の20期生とちょうど同じ学年になります．話は戻りまして，研究面では大学院1年目の12月から口腔生化学の教室，特に西田崇先生にお世話になり，昨年度末に退官されたの滝川正春教授の下で学位を取得しました．その後，補綴科(クラウンブリッジ)の医員として働いていたときにDr. Youngのラボに留学中だった大野充昭先生が医局に戻ってこられることになり，後任としてお世話になることになりました．

留学する機会をいただいたことだけでも恵まれていたのですが，こちらに来て4年，ラボでの環境も大変恵まれていると日々実感しています．NIDCRに30年以上在籍しているアメリカ人のボスの英語はあ

まり癖がなくとてもわかりやすく，実験のことや買いたい試薬があり相談に行くといつも返ってくるのは”Why not?”，やりたいことはたいてい何でもさせてもらえる素晴らしい環境です．時には実験以外のことでも何でも相談に乗ってくれたり，私の誕生日には手作りのケーキを焼いてきてくれたりと，ちょっと若いアメリカでのお母さん的存在でもあります．留学当初の実験のディスカッション時には，ボスが言いたいことを単語や絵を紙に書きながら説明してくれて，ディスカッション後にはそのメモ書きを渡してくれていたこともありました．英語にまだ耳が慣れていなかった私は言葉が拾えないことも多々ありましたので，後からディスカッション内容をまとめるのに大変役立ちました．そんな気遣いも女性ボスならではという印象を受けました．

研究の話も少しだけしますと，Dr. Youngのラボでは細胞外基質であるProteoglycanのうち，Small Leucine Rich Proteoglycans (SLRPs)に分類されるBiglycan, Fibromodulin, Decorinの研究を長年行ってきましたが，私はそんなラボ内では唯一CCNファミリーというタンパク質ファミリーに属するCCN4/WISP1の硬組織における機能解析を行っています．幸いCCNファミリーには大学院時代から関わりがありましたので，新しいテーマでも親しみを持って取り組むことができました．現在は，留学生活の締め括りに向けて日々精進しているところです．



日本を離れて一人で生活してみると，学生時代に一人暮らしをしていたとき以上に人と人との繋がりのありがたさや不思議な縁を感じることがあります．日本を離れて初めて気付いた日本の良さもありました．そして，ここベセスダの地で今までやってこられたのは，何よりも多くの方々の理解と協力のおかげだとこの留学記を書きながら改めて実感しています．私を支えてくださっている素晴らしい友人，同僚，岡山大学の先生方，そして家族に心から感謝して本稿を締めくくりたいと思います．

「留学記」

歯科矯正学分野
黒坂　寛

岡山大学関係者の皆様、ご無沙汰しております、もしくは、はじめまして。18 期生の黒坂です。ご指名に預かりましたので近況報告をさせて頂きます。2011 年から私はアメリカ合衆国ミズーリ州にある Stowers Institute for Medical Research に研究員として働いています。 Stowers Institute は Stowers ご夫妻（American Century という投資会社の創設者）が御自身の癌の闘病生活を通し基礎研究の大切さを認識されて投資、設立された研究所です。中西部に関わらず、各研究室の Principal investigator（研究責任者、PI）は各分野で名の知れた研究者が名を連ね、研究所としてもインパクトのある成果を常に出し続けています。その事は以前から承知していたので、こちらに来て初めてのラボミーティングでインド人の大学院生が（私の過去の研究生活からは）考えられない程の量のデータを発表したのを聞いて、きっとこの学生は毎日夜中まで実験しているに違いないと驚いたのを今でも鮮明に覚えています。しかし、その学生を観察しても毎日夜中まで仕事しているという事はありませんでした。ではどうやってそんなデータが出せるのか？理由は時が経つ毎に明らかになっていくのですが、一つは徹底した仕事の細分化をベースにした研究所としての効率化です。ラボには秘書に加えてテクニシャンが数人、加えて幅広いサポートが可能な research facility が存在します。例えばマウスの組織切片を作成するにしても我々研究員がするのはマウスの回収のみで、サンプルを facility に渡すと一週間以内に切片が仕上がって取りに行き、顕微鏡に向かいデータを集めるという感じです。それに用いる全ての試薬はテクニシャンが作成し、機器の洗浄は facility がやってくれます。組織切片に限らず、細胞培養、遺伝子発現解析、最近では出来あがったサンプルの写真撮影までやってくれるようになりました。じゃあ一体お前は何をしてるんだ、と思う方も多いと思います。私も当初はそう思っていました。じゃあ俺する事ないやん、と。しかし、それは間違いで結果としてはデータの解釈、整理に大きな労力を費やす（費やせる）事になるのです。脳の進化に例えると最初は一つの神経細胞が情報伝達や記憶等を同時に司っていた（一人の人間が実験から解析まで全てやる）のに比べ、高等動物では多様な神経細胞を獲得、それぞれの機能を細分化してより高度な情報処理が出来るようになった（一人が実験、他の人が解析）のと似ています。その結果、時間では説明のつかないデータ量を生産出来る訳です。もう一つは、これも大分後に気付くのですがプレゼンテーション能力です。要するに、良いプレゼンをする事によって“考えられない程の量のデータ”に拍車をかけていたという事です。こちらに来て認識した日本との大きな違いの一つは研究成果の外部に向けた発信能力です。PI は勿論の事、学生も驚くほど美しく論理的なプレゼンをします（当然、個人差はあります）。Q&A でもロジカルな議論を展開し、聴衆に“お、こいつは出来る”と思わせるのが上手いです。具体的な違いとしてはデータの美しさ云々より（日本ではここを最重要視しがち）、論理的な流れに重きを置く事によって聴衆の記憶に残るプレゼンをしている様に思います。ここでもまた、データの解釈に大きな労力を費やせる事が効いてきます。何故、総合的にこのような事が可能なのかと考えると一つには個々の寛容性が大事だと最近感じているのですが、長くなるのでここには書けません。興味のある方は個人的に聞いて下さい。こちらにきて 3 年が経過し、やっとどのように振る舞えばもっとも生産的に過ごせるかが少しずつ見えてきた気がしております。もし、将来的に scientific community に貢献する事があれば自分が今経験している事を伝えて行けたらと思います。最後に岡山大

学歯学部及び関係者の皆さま方の益々の発展を祈願し、簡素ではございますが近況報告とさせて頂きます。

An amazing experience

Thaise Mayumi Taira,
Dental student of University of Sao Paulo

I am Thaise Mayumi Taira, Brazilian and I am twenty two years old. My last name "Taira" (name of my father's family) is from Okinawa, Japan. Therefore, I have a Japanese descent, I am "yonsei". I study dentistry in a University of Sao Paulo in Ribeirao Preto and I am in fifth grade (the last one).

When I travelled to Kyoto with my friends, in Kyomizudera.

The begin of this year I went to Japan with another six students to do an exchange program in two months, January and February, in Okayama University Dental School. I was really happy because it was my dream to travel to Japan and my brother was in Japan too. The teachers responsible for this exchange were the Professor of the Radiology Department of University of Sao Paulo, Plauto Christopher Aranha Watanabe and the Professor of the Oral Radiology Department of Okayama University, Junichi Asaumi. The experience to see the Dentistry in another country like Japan was very useful for me because I could accompany surgeries, many dentists doing dental procedures, the classes and many lectures about the post graduates works.

We arrived at Okayama City on January 4th, 2014, and stayed accommodated in the Kuwanoki Dormitory, near Tsushima Campus. The Dormitory was very confortable and I liked so much to stay there. The classes at the Okayama University started on January 6th. So, we passed four weeks having classes with the students from the 4th grade. The subjects studied were: Oral Radiology, Preventive

Dentistry, Anesthesiology, Oral and Maxillofacial Surgery, Oral Pathology, Implantology (Bridge), Periodontology, Prosthodontics, Orthodontics, Pediatric Dentistry, Operative Dentistry, Preventive Dentistry.

We had a "Welcome party", to know some teachers of all departments of the Okayama University and some students of the University.

"Welcome party", a great party with the teachers and students of Okayama University and brazilian and taiwaneses students.

After these four weeks, in the next week (6th to 13th of February), at mornings, I visited the Orthodontic Clinic, Pediatric Clinic and the Operative Dentistry. I watched two Surgeries: the first it was a extraction of four third molars and second it was a Sublingual Tumor Remotion. In the afternoons, all exchanged students started a English Lecture Series, where in each day a teacher gave us a Lecture, and then, we had to make a report by each topic studied. The topic discussed were: Japanese Culture; Cartilage Metabolism and CCN family proteins; Stem Cell Research and Tooth and Salivary Gland Regeneration; Orthodontics and Bone Metabolism; Dental Anesthesiology in Japan; Understanding of Dental Disease Development based on Host- parasite Interaction; Cell Environment and Organ Regeneration; Material Sciences and Chemical Bond. It was very useful because I could know what kind of researchs have in Okayama University and how they did their works. All the lectures was very interesting.

Furthermore, I had an opportunity to presented my work about my scientific iniciation and the topic was “The role of Nod2-like receptor in the modulation of osteoclastogenesis and osteoclasts activity”, on February 3rd, 2014. It was a very valid experience for my career.

Talking about Japanese culture I liked the convenience stores, the "combinis", because it is very convenient and it is not common in Brazil; I loved the japanese foods like lamen, udon, yakiniku; the stores are very cool; and the Japanese people are very polite and receptivity.

Someday I woke up and see through the window the snow, everything was so white, so beautiful. I was really surprise because it was my first time that I could see the snow. In Brazil, the most of days has high temperatures.

To the end, I enjoyed so much to stay a few days in Japan, I was so delighted with the shrines and temples like Fushimi Inari, Kiyomizudera in Kyoto, Saijo Inari Shrine in Okayama, and with the beautiful places that I could visit like Skytree and Shibuya Station in Tokyo, Universal Studios in Osaka, among others. I would like to say thank you to my parents Lauro Taira and Alice Taira who gave me full support to do this exchange, to the teachers Plauto Watanabe and Junich Asaumi for this big opportunity, to Mariko Fujita who help us in everthing that we need and to her mother who had pacient and attention to make some Japanese classes for us, to the friends that I made in the University, and for the Okayama University for the hospitality and receptivity.

The first ride in Okayama city with the teacher Junichi Asaumi and brazilian students.

Two amazing months!!!

Bianca Mitsue Goulart Sobue,
Dental student of University of Sao Paulo

My name is Bianca Mitsue Goulart Sobue, I'm from Brazil, and I study dentistry at the University of São Paulo, in a city that calls Ribeirão Preto (São Paulo state).

I had never travelled out from Brazil, and meet Japan always was my wish, since I was child. But why Japan? Well, let's talk a little bit of my history… I'm descendent of a japanese family, and my great-grandparents went to Brazil in the period of immigration, almost a hundred years ago. When I was one year old, my uncle and my aunt went to live in Japan, and after this moment I never saw them again. I decided to be dentist when I was finishing the school, when I was almost seventeen years old. So, I passed in the college, started to study dentistry in the year of 2010, and now I'm in the last grade (here we graduate at the 5th year).

Last year I met an Exchange Program of my university, that could turn my wish come true! I sent a lot of mails to the Okayama University to get more information about the program, and after I did a test to get a scholarship… Guess what? I passed!!! So, I could get the chance to meet one of the bests Universities of Japan, and I could meet my uncle and my aunt!

I arrived to Japan in 30th December of 2013, I stayed at my uncle's house (who lives in Nara state) until 4th January 2014.

Figure 1: me and my family

I went to Okayama city in 4th January. Me and more seven brazilians friends stayed at Kuwanoki Dormitory. Oh, I found everything different from Brazil! The streets, the people, their clothes, the cars, the buses, the food, everything! In the Okayama University I met a lot of people, who passed to me a lot of values, cultures, and respect. I loved to meet everybody. I think that Japanese people carry a value that is uncommon in a lot of countries. They are very polite, funny, intelligent and sweet.

The Okayama University Dental School is a great university, it has a very good didacticism, and has a

thing that I think is very interesting: the politic of treat the pacients only after the course. Here, in our country, we start to treat the pacients in the second grade. Both of the methods has their advantages, but I think that this ethic aspect (finish the graduation before work) is very important.

I don't know the Japanese language, so I had some students that helped us and talked with us in English. I had the opportunity to have Japanese Classes during the exchange program… I liked it too much and I could learn a lot of words, gestures and I had news friends from this course too. The teacher was very funny and lovely!

Figure 2: The brazilian guys and the amazing japanese teachers!!!

I had theoric classes with the students of 4th grade during four weeks. I liked these classes, because even they were in japanese, our new friends could translate it for us! The subjects and concepts of classes are very similar with ours from University of São Paulo.

Figure 3: We enjoying the radiology class with the clickers!

I visited the clinics of: surgery, orthodontic and pediatric dentistry. I liked so much all of them, but there one special that I loved to visit: the pediatric dentistry's clinic. All the child are very respectful and educated, and they captivated me!

After, I watched a lot of lecture English class, which was so important to increase my knowledge. I learned a lot with the researchers of the Okayama University. They are very smart and dedicated with their job.

I had the opportunity to meet a lot of places, like some temples of Kyoto, the Tokyo Skytree, the Shibuya, the Monti Fuji… Each visit was so amazing and funny!!! A exciting day for me was when started to snow in our trip to Kyoto! In Brazil there is no snow, so I think it was very funny!

Figure 4: Meeting the Best places of Kyoto!!!

I returned to Brazil on 3rd March 2014, and I'm missing all the things that I met in Japan!

I would like to say "thank you" to all the Japanese people that stayed with me in this period and I would like to say that they were my family while I was living in Japan. Thank you all the teachers, it was amazing to meet you! It was a pleasure to meet this renowned University. I wish a lot of Japanese students could visit our University. It will be a pleasure meet you in the same way that you meet me! Dozo yoroshiku onegai shimasu!!!

Figure 5: A special day with some teachers, graduate students and with the chair of Okayama University Dental School.

Hello everyone~

Yeh, Pei Cheng
School of Dentistry, Taipei Medical University

My name is Yeh, Pei Cheng. I come from Taipei, Taiwan.I am the fifth grade student of the dentistry department of Taipei Medical University. It is really my honor to have this opportunity for the communication between Okayama University and TMU. This was the first time that I have stayed in Japan for one month. During our visiting in Okayama, everybody here treated us like good friends and was very concerned our daily life. Our visit was mainly divided into two parts: one was lectures including the fourth grade's subjects and special topics; the other one was to look around the clinical departments in hospital. Teachers answered our question in detail patiently. I have learned so much and some topics inspired me want to learn more.

In addition to learning, becoming the student here and experiencing Japanese life were very impressive for me.We rid bicycle from dormitory to hospital everyday despite cold weather here.This was an easy way for me to enjoy life in Japan casually. After school, sometimes friends recommended us many Japanese cuisines and dined for a delicious meal together. During this time, we could exchange some ideas (including culture differences, daily lives and knowledge etc.) with Japanese
dental students. Besides, It's very interesting for me to buy some ingredients in the supermarket and cooked by myself.I have also attended some special events in Japan such as throwing the beans at Setsubun,making Bizen Pottery,practicing Kendo,wearing Kimono and so on.

I must appreciate such a good chance again at last. I hoped that this kind of communication can keep going on in the future.Thanks to prof.Miyawaki and everybody here,I had a really wonderful and unforgettable experience in my life.I will treasure the friendship forever and ever.

International Exchange Student Program Report

Wu, Shiu-Sien (吳琇璇)
School of Dentistry, Taipei Medical University

I was very happy to join the exchange student program to Dental School of Okayama University. Department of Dental Anesthesiology and dental students held welcome parties for us. In the party of Department of Dental Anesthesiology, I met all the staffs that we were stay with and helped us for one month. And I learned how to make tacoyaki from the staffs, it is really interesting for me. In the party of dental students held, all the dental department professors introduced their department and we also played games, it was a really great party.

In the first two weeks, we join the classes of fourth grade students. I think it was very suitable for us because the subjects are familiar to us, fifth grade students, and we can see how the dental students learn in the university in Japan. We also join the experiment classes of fourth grade students, I found some things different, such as caries detection and many other new things that we don't use in our experiment in Taiwan. In the next two weeks, we had the English lecture classes with Brazil dentistry students. The English lecture classes were very excellent.

In this one month, we had tour of dental clinic of every department of dentistry in the hospital. I saw a lot of new things in the dental clinic. The most important, I saw two cases in the special needs department and two operations in the operation rooms that the dental anesthesiologist did the sedation and general anesthesia to the patients. This is the most special things and what I want to see in the hospital.

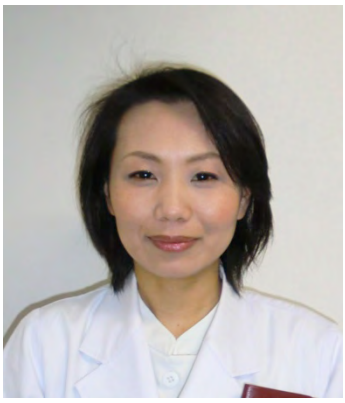
In this one month, I visited many places in Okayama, such as Okayama Castle and Kōraku-en. I also visited Himeji, Kyoto, Osaka. Especially the trip in Osaka, I saw the Disney's Lion King show in Shiki Theatre and I went to Osaka Aquarium Kaiyukan. It was really great visiting for me. Every places I visited is very beautiful and every Japanese was really polite and kindness to me. Moreover, every

Japanese food is very delicious. I really love Japan, I hope I can visit Japan again in the near future.

I was very happy to join the exchange program and stay in the Okayama University and hospital for one month. In fact, I think one month is a little too short, I hope I will have chance to come to Okayama University again in the future. I am really appreciating for everyone who ever helped us in Okayama University and in Japan.

「岡山歯学会　優秀論文賞を受賞して」

歯周病態学分野
工藤　値英子



この度は岡山歯学会奨励論文賞に選出いただき，選考委員ならびに岡山歯学会学会員の皆様方に心より御礼申し上げます。今回，以下の論文が受賞対象となりました。”Chieko Kudo *et al.*: Assessment of the plasma/serum IgG test to screen for periodontitis. J Dent Res. 2012 Dec;91(12):1190-1195. “

この論文は，「日本学術振興会科研費基盤研究」および「厚労省科研費長寿科学総合事業」による臨床研究成果の報告です。岡山大学を中心とした全国11大学による「歯周病原細菌感染度を評価する血中IgG抗体価」を用いた多施設臨床研究の成果を報告しています。本研究では，歯周病原細菌である *Porphyromonas gingivalis*（*P. gingivalis*）に対する指尖血漿IgG抗体価検査の歯周病スクリーニング検査としての有用性について調査しました。その結果，本検査がスクリーニング検査として利用可能と判断し，*P. gingivalis* に対する血漿 IgG 抗体価の基準値を設定しました。さらに，*P. gingivalis* に対する血漿 IgG 抗体価が歯周病の重症度と正の相関があることが示唆されました。本検査は，歯科医師が専門的精密検査を行う前に，早期に慢性歯周炎患者をスクリーニングすることに寄与すると考えています。近年，歯周病の全身への関与がわかってきており，この血液検査の活用が歯周病に関連する全身疾患の発症予防や進行抑制に寄与することも期待されます。従って，本検査の普及が今後の課題であり，地域医療機関における医科歯科連携による多施設臨床研究として，「歯周病治療による動脈硬化指標の改善に関する研究」に取り組んでいます。一方で近年，インプラント治療後におけるインプラント周囲炎の増加が問題となっています。これに対して，細菌学的評価に基づいたインプラントを含む口腔内の感染管理を充実させ，インプラント周囲炎を予防していく必要があります。その手段として，この歯周病原細菌感染度検査によるインプラント周囲炎のリスク判定や予知システムの確立に取り組んで参りたいと思います。このことが，特に歯周病を罹患しているハイリスクなインプラント治療患者に良好な予後を齎すことに期待を寄せております。

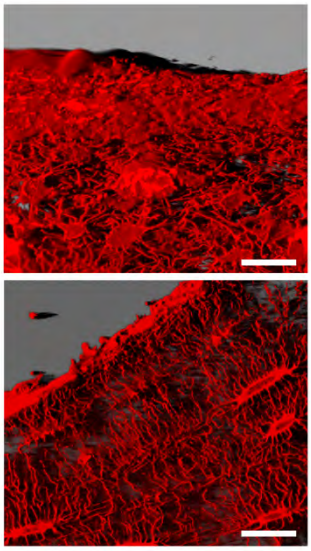
本研究を通じて，歯科医療の質向上には臨床検査と臨床研究の発展が重要であることを学び，大変貴重な経験をさせて頂きました。今後も，臨床研究の成果を実際の臨床現場へ還元して，高齢者医療さらには医科歯科連携医療が充実するよう，臨床家として取り組んで参りたいと思

います。

最後に，ご指導頂きました高柴正悟教授をはじめ、多くの共同研究者の先生方に深謝致します。そして，岡山歯学会の益々の御発展をお祈り申し上げます。

「岡山歯学会　優秀論文賞を受賞して」

矯正歯科
菅原　康代



この度は、“Sugawara Y, Kamioka H, Ishihara Y, Fujisawa N, Kawanabe N, Yamashiro T, The early mouse 3D osteocyte network in the presence and absence of mechanical loading. 2013 Jan; 52(1):189-96.” において、岡山歯学会優秀論文賞を頂く事になり大変光栄に感じております。

骨細胞は骨基質中でネットワークを形成しており、このネットワークは機械的刺激に反応するための重要な要素であると考えられています。骨細胞間のネットワークは骨芽細胞から骨細胞に分化する際に形態変化を起こして生じた樹枝状の突起により形成されますが、骨細胞は周囲を堅い骨基質に覆われているために、これまでは３次元的な構造の観察や形態計測は困難でした。私達の教室ではニワトリ胚頭蓋骨中の骨細胞がアクチン線維に富んでいることに注目し、骨組織中の骨細胞、骨芽細胞のアクチン線維を蛍光色素と共焦点レーザー顕微鏡を用いて３次元構築し、形態計測する方法を考案しました。

しかし、これまでの研究ではニワトリ胚頭蓋骨中の骨細胞についての観察でした。そこで本研究では胎生期から出生後のマウス長管骨中の骨細胞ネットワークの形成およびその変化について、成長の観点からとらえるとともに、メカニカルストレスの有無によるネットワークの変化を３次元的にとらえ、形態計測しました。その結果、これまでは薄い胚頭蓋骨中の骨細胞のみの観察であったものが、成長後の堅く、厚い長管骨中でも骨基質の骨細胞ネットワークを三次元的にとらえることが可能となりました。また、本研究によりメカニカルストレスの有無により骨細胞ネットワークが変化し、突起の方向や細胞体の並び、核の形にまで変化を及ぼすことが分かりました。これらの結果はメカニカルストレスを感知するといわれている骨細胞の機能を解明する上で有効であると考えております。今後、さらなる発展を目指してゆきたいです。

最後になりましたが、ご指導いただきました上岡寛教授、山城隆前教授（現大阪大学教授）、ご協力いただきました共著者の先生方ならびに教室員の先生方に感謝いたしますとともに、賞に選出して頂きました岡山歯学会関係者各位の先生方にこの場をお借りいたしましてお礼申し上げます。

「岡山歯学会奨励論文賞を受賞して」

歯学部先端領域研究センター
青山絵理子

このたび私は以下の論文で岡山歯学会奨励論文賞を受賞させていただき、大変光栄に感じております。（FEBS Lett. 2012 Dec 14;586(24):4270-5. CCN2/CTGF binds to fibroblast growth factor receptor 2 and modulates its signaling. ）

本論文ではCCN2（CCN family protein2、CTGF）がFGF（Fibroblast growth factor）レセプターファミリーの一つであるFGFR2と結合することを見いだしました。さらに、CCN2は単独でFGFR2のシグナルを促進するのではなく、FGFR2のリガンドとして知られているFGF2およびFGF4とFGFR2の結合を強化し、それによってFGFR2シグナルを促進することを示しました。また、この促進作用によりFGF2およびFGF4が有効濃度以下であってもCCN2と共存することで骨芽細胞様細胞の分化促進作用を発揮しうることを明らかにしました。今回の成果はCCN2の作用機序の一端を解明しただけでなく、FGF/FGFRシグナルの促進因子としてのCCN2の役割を示すものであり、このFGF/FGFRシグナル系が単純にリガンドとレセプターの発現量のみで制御されているわけではなく、CCN2のような分泌タンパク質による新たな制御機構を有することを示すものでもあります。さらに、この論文の内容に関しては「CCN2/CTGF によるFGF2-FGFR2結合の修飾」（生体の科学 vol.64, no.5, 医学書院　）と題してミニレビューを執筆する機会を得ましたので、そちらでもFGFRシグナル系におけるCCN2の役割について考察しております。

私はもともと薬学部の出身で免疫学に関する研究で学位を取得したのですが、縁あって岡大歯学部に現職を得てからは滝川教授らのグループと共同研究させていただくようになりました。それ以来、一貫して骨･軟骨領域におけるCCN2タンパク質の結合因子とその結合の生理的意義を解明するための研究を行っております。この因子は骨・軟骨領域にとどまらず多彩な領域で生理機能を発揮していることでも知られており、この研究を通じて歯学部のみならず国内外の他の分野の研究者の方々とも知己を得ることができたことも思わぬ収穫であったと感じております。

最後になりましたが、熱心にご指導ご鞭撻いただきました滝川正春先生、久保田聡先生をはじめ、温かい励ましやご協力をいただいた多くの方々にこの場を借りて心よりお礼申し上げます。

「理想の歯科医師像」

岡山大学病院 総合歯科
河野　隆幸

厚生労働省の HP には，歯科医師臨床研修の基本理念は，「臨床研修は，歯科医師が，歯科医師としての人格をかん養し，将来専門とする分野にかかわらず，歯科医学及び歯科医療の果たすべき社会的役割を認識しつつ，一般的な診療において頻繁に関わる負傷又は疾病に適切に対応できるよう，基本的な診療能力を身に付けることのできるものでなければならない。」と書かれています。我々総合歯科の指導医は，この基本理念に基づいて，日々研修歯科医の指導を行っています。

岡山大学病院の臨床研修の特徴の一つに，電子ポートフォリオがあります。ポートフォリオは，近年医学教育で注目されている教育・評価法です。学習者はポートフォリオを作成することによって，振り返りや気付きを行い，その結果，自己成長するとともにプロフェッショナリズムを獲得することが出来るとされています。当院で採用している電子ポートフォリオの中心は，専門診療科の先生方にも協力していただいていますが，日々の臨床研修を行った際に入力するものです。研修歯科医には，日々の臨床研修を行った際には必ず入力するように指導しています。それ以外の項目として，研修開始時に入力する理想の歯科医師像という項目があります。これは，どのような歯科医師になりたいか，またそのためにどのような目標を持って，具体的にどのように行動しないといけないかを歯科医師 1 年目の最初に考えることを目的としています。そして，1 年間の研修修了時に再度入力するように指導しています。研修歯科医師には，きちんとした目標を持って研修を行うこと，また，その目標に向かって努力することは大切であると伝えています。また，理想の歯科医師像は，1 年目の理想の歯科医師，5 年目の理想の歯科医師，20 年目の理想の歯科医師があって，何年たっても常に理想の歯科医師を目指して努力することが大切だと伝えています。当然，私にも現時点での理想の歯科医師像があります。研修歯科医の最初の理想の歯科医師と，1 年間の研修が修了した時の理想の歯科医師は微妙に変化しており，この内容からも研修歯科医の成長をうかがい知ることが出来，興味深く思います。また，我々指導医も初心を思い出すことが出来，日々の臨床に改めて向きなおすことが出来ます。

次に診療室の近況を少し紹介させて頂きます。ご存知だと思いますが，3 月の中頃に歯学部附属病院時代から代わり映えのしなかった総合歯科の受付と観血的処置室を改装しました。木目調を基調とした落ち着いた受付になるとともに，観血的処置室は個室タイプでスペースを広く取り，より観血的処置に配慮したスペースになりました。ぜひ，総合歯科で学生や研修歯科医を指導する際には活用していただけたらと思います。

最後に，臨床系診療科の先生方には、日頃から研修歯科医の指導やポートフォリオのコメント入力に並々ならぬご協力を賜り、この場をお借りして深く感謝申し上げます。今後ともより一層のご指導をよろしくお願い致します。

スチューデント・クリニシャン・リサーチ・プログラム

岡山大学歯学部5年　　王 碩

私は、2013年8月に行われた第19回スチューデント・クリニシャン・リサーチ・プログラム（SCRP）日本代表選抜大会において、幸運にも優勝することができ、同年11月にアメリカ・ニューオーリンズで開催されたアメリカ歯科医師会（ADA）年次大会のSCRP部門で発表する機会をいただきました。 4日間という短い滞在期間でしたが、現地では大変充実した、有意義な時間を過ごすことができました。

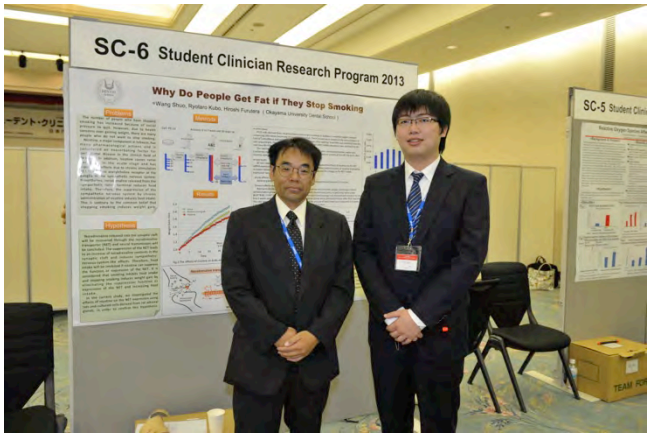
今回のADA大会はニューオーリンズで行うことになり、 全米または全世界から歯科関係者、様々な歯科関連企業が集まり、会場は盛大な祭りのようにとても賑やかでした。全世界では36カ国がSCRPに参加し、今年度は16カ国の代表者がADA年次大会に出席しました。中には５つの国の言葉を喋れる方、学術誌に多数の論文を発表した方、さらには26歳の若い年齢で専門医の資格をもつ方などがいて，優秀な人達ばかりでした。

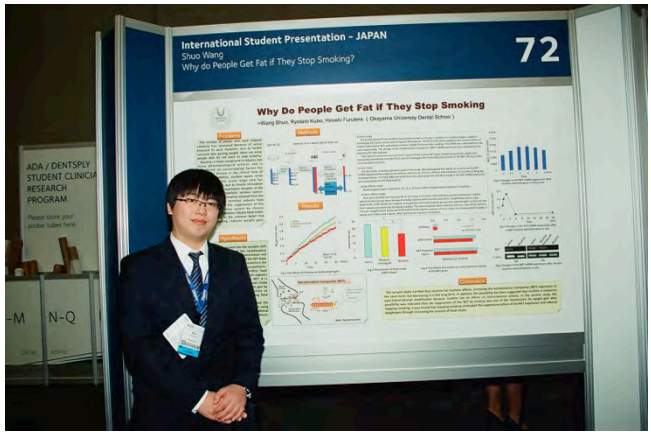
発表形式は日本代表選抜大会と同じくポスター発表でしたが、アメリカ風の自由な雰囲気は日本での発表とは異なるものでした。自分も日本での発表は選抜大会ということもあり、緊張感で一杯だったのですが、アメリカでの発表は緊張する事も無く、質問してくれる人達との会話を楽しむ余裕もありました。また、当初3時間という発表時間は長いとも感じられましたが、お互いに他国代表のポスターを見て回ったり、研究についてのディスカッションなどを行っているうちに，あっという間に時間が過ぎて行ってしまいました。彼らはとても積極的で、互いの研究内容の他、各国の学生の様子、将来の道、今後の歯科発展に至るまで，様々なことについて熱く語り合うことができました。見回ったポスターの中でも特に印象的だったのは、歯磨きが苦手な子に、歯磨剤の代わりにアメを使って歯磨きさせ、好きなアメで歯磨きに慣れさせることで歯磨きを克服した事例の発表でした。まさか齲蝕の誘発因子である蔗糖を齲蝕防止に利用するとは、感覚・発想力の違いというものを実感しました。

また、アメリカの学生たちのコンテストの時間に空き時間ができ、各国の学生たちと交流する時間も多くなったため、とても仲良くなることができました。同行でニューオリンズの街を回ったり、プライベートで食事に行ったり、ニューオリンズの文化についても少し理解できた気がします。また、無料で参加できる講演を聞きに行ったりもしました。先生たちの素晴らしい講演を聞き、自分の英語力がまだ不十分であることを実感し、これからも努力すべきだと思いました。夕方にはSCRPの授賞式が行われ、私達各国の代表もアメリカの学生と同じ舞台に立ち、紹介してもらいました。授賞式後のパーティーでは盛り上がり、各国の学生との交流も深まり、かなりプライベートなことまで話すことができました。4日間という時間はあっという間でしたが、これらの経験が、今後の私の人生に大きく影響を与えることは間違いありません。

今回の機会をきっかけとして、初めて世界の大きな舞台に立ち、今まで体験できなかったことを体験したことにより、留学生の私であっても初めて自らの目をこれまで未知のより大きな国際社会という舞台に向けることができました。また，その舞台の広さを知りました。しかし，私は国際社会という舞台の広さに怯えることなく、再びこの舞台で輝く自分になりたいと強く願っています。ポジティブな刺激を受け今後の学生生活でも、そして一人の歯科医師として社会に出ても、常に責任感を持ち、歯科将来の発展や国際交流に貢献し、国際社会と言う大きな舞台で活躍できるようになりたいと思います。

このような素晴らしい機会を与えてくださった日本歯科医師会、デンツプライ社、関係者の皆様、十川紀夫先生をはじめご指導いただいた先生方に、厚く御礼申し上げます。そして、歯科薬理学教室で共に研究した古寺寛君、久保亮太郎君をはじめ最高の仲間に心より感謝いたします。

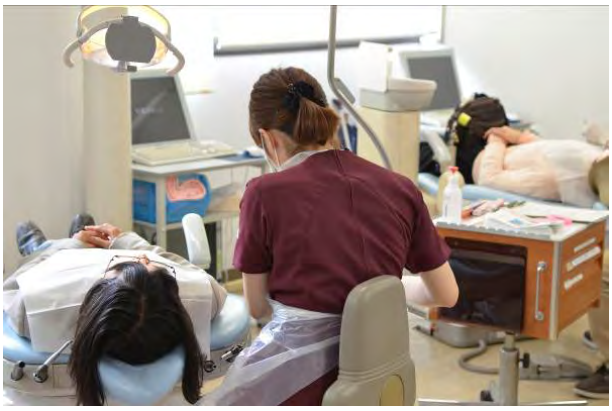




「平成２５年度　歯科衛生士室　活動報告」

歯科衛生士　三浦　留美
歯科衛生士　高橋　明子

◆「歯ッスルフェアー　2013」～きれいなお口で元気に過ごそう～イベント報告　◆



平成２５年６月６日（木）、「歯と口の健康週間」にちなんで毎年行っている「歯」に関するイベントを開催しました。内容は、ミニ公開講座や、歯科衛生士によるブラッシング、お子様へのフッ素塗布、歯科看護師による嚥下食の展示、歯科技工士による特殊技工物の展示、チェロとピアノの演奏等、お子さんから大人の方まで参加いただける内容としました。ぬり絵コンテストには９０枚を超える応募があり、とても独創的で楽しい作品が集まりました。特に元気いっぱいに描いてくださったお友達８人に、副病院長、副看護部長から、賞状と賞品をお渡ししました。

チェロとピアノの演奏会は、毎年楽しみに来て下さる方々もおられ、大変盛況な開催となりました。通りがかりの患者さんからも「とても癒される音色に、思わず足を止めて聞き入りました。」と言っていただき、私共も喜ばしく感じています。　このイベントを通じて、岡山大学病院を知っていただき、多くの方に「歯と口の健康」について関心を持っていただけたらと、願っています。

◆ 平成２５年櫂の木賞受賞 ◆

歯科衛生士もチーム医療の一員として関与しています「頭頸部がんケアチーム」が本年度の櫂の木賞を受賞しました。歯科衛生士は主に頭頸部がん患者さんの口腔ケアや相談、病棟でのラウンド、カンファレンス等に参与

しております。今後とも多職種と連携を取って、患者さんのよりよい口腔環境を整えるお手伝いをしてきたいと思っております。

◆　第 34 回　岡山歯学会学術集会　歯科衛生士セッション報告　◆

平成 25 年 10 月 27 日（日）に、第 34 回岡山歯学会学術集会　歯科衛生士セッションを開催いたしました。

今回は『がん治療に関わる現場から～歯科衛生士に求めるもの～』と題し、看護師・薬剤師・歯科放射線科歯科医師・口腔外科（病態系）歯科医師・ソーシャルワーカーの先生方を講師にお迎えし、御講演頂きました。歯科衛生士、歯科衛生士養成学校の学生や教員など、約 120 名の参加があり、大変盛会なセッションとなりました。

《講演プログラム》

講演 1：「外来がん化学療法における多職種の関わりと患者支援～看護師の立場から～」
岡山大学病院　看護部　　福武　恵　先生

講演 2：「抗悪性腫瘍薬による口腔粘膜炎への対応～歯科衛生士に求めるもの～」
岡山大学病院　薬剤部　がん化学療法管理室　　藤原　聡子　先生

講演 3：「放射線治療とは？」
岡山大学病院　　歯科放射線科　　松崎　秀信　先生

講演 4：「口腔癌に対する逆向性超選択的動注化学放射線療法と口腔粘膜炎対策
～歯科衛生士の介入の有用性～」
岡山大学病院　口腔外科(病態系)　　伊原木　聰一郎　先生

講演 5：「がん相談におけるソーシャルワーク」
岡山大学病院　総合患者支援センター Social Worker　　日高　千陽　先生

◆　平成 25 年度　歯科衛生士受託実習生　実習受け入れ実績　◆

今年度は、歯科衛生士養成学校全 8 校より、約 330 名の受託実習生の実習受け入れを行いました。当院歯科衛生士室は岡山県内４校、兵庫県２校、広島県１校、香川県１校と県内外から学生を広く受け入れています。

各診療科での歯科診療補助実習だけでなく、中央材料部や薬剤部、歯科技工室などの中央施設の見学

など学校によって実習内容は様々です。特に当院歯科衛生士の参加するチーム医療（多職種連携）の見学を希望する学校が多くなっているのが、昨今の現状です。時代のニーズによって、歯科衛生士教育も変わりつつあるのを感じております。

今後も、各診療科の先生方、関係部署の職種の皆様にご協力頂きながら、歯科衛生士受託実習生の教育に寄与できればと考えています。宜しくお願い致します。

「平成 25 年度の技工室」

診療支援施設技工室
神　　桂　二

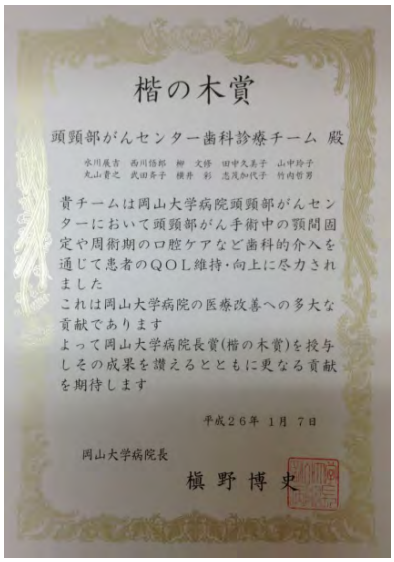
昨年に引き続き歯科技工士 8 名で歯科診療支援はもちろんのこと、医科との連携部署の頭頸部がんセンター、周術期管理センター、NST などにおいて、チーム医療の一員として診療支援を行っております.

このことは歯学部のある全国の国立大学病院の技工室からも注目を浴びております. 平成 25 年 12 月に岡山で開催された全国国立大学歯学部附属病院歯科技工士協議会において「いかにして医科と連携するか」ということが議題の中心の一つにあがって各大学でも３Ｄプリンターの導入やペリオへの参画が検討され、参加者は会議前日から来岡して頭頸部のキャンサーボードや周術期臨床検討会にも参加するなど関心の深さが窺われました.

また、ペリオ人材育成研修センターで「周術期チーム医療認定歯科技工士」の認定を５名が取得し、頭頸部がんセンター歯科診療チームの一員として手術支援が評価され岡山大学病院長賞（櫂の木）を平成 24 年度に引き続き受賞しました（図１).

教育および地域貢献としては、穴吹学園、吉備国際大学、朝日高等歯科衛生専門学校、インターナショナル岡山歯科衛生専門学校の 4 校から歯科衛生士学生さんの技工室見学実習を受け入れています. また、岡山歯科技工専門学院の卒後研修コースの学生さんと邑久光明園から歯科技工士の卒後研修生を受け入れています.

技工室は医療技術支援部門として歯科および医科・歯科連携治療に支援・貢献できるよう努力していきたいと思います.



（図１）　　（図２）

「平成 25 年度の活動」

・6 月 6 日（木）歯の衛生週間イベント（図２）
・10 月 22（火）~28 日（月）周術期海外施設交流（カナダ）: 竹内　哲男
・10 月 27 日（日）第 34 回　岡山歯学会総会・学術集会　歯科技工士セッション
　① 摂食・嚥下機能と咬合」

岡山大学病院　スペシャルニーズ歯科センター：助教　村田　尚道

② 歯科衛生士の立場から多職種連携を考える」

吉備国際大学短期大学部保健科デンタルビューティー専攻：准教授　福田　弘美

・11 月 13（水）~15 日（金）桑田中学職場体験学習（図３）

・11 月 14（木）・15 日（金）第 10 回全国国立大学法人病院診療支援部会議（長崎）

「岡山大学病院技工室の医療連携の実際」：神　桂二

・11 月 24 日（日）日本歯科技工学会中国・四国支部学術大会（徳島）（図４）

「岡山大学病院歯科における新製歯科技工物の誤飲・誤嚥事故防止対策と技工室の取り組」

：瀬島　淳一

・11 月 30 日（土）第 15 回日本口腔顎顔面技工研究会学術大会（奈良）

「エピテー製作の実際（エピテー製作依頼から納品まで経験）」：宮崎　文伸

・12 月 6（金）・7 日（土）第 25 回全国国立大学附属病院歯科技工士協議会（図５）

① 「岡山大学病院技工室の医療連携の実際」：竹内　哲男

② 「大学病院を取り巻く諸課題」

：文部科学省高等教育局医学教育課大学病院支援室　病院第１係　係長　竹本　浩伸

③ 「歯科技工のパラダイム転換」

：岡山大学歯学部長・技工室長　窪木　拓男

④ 「これからの歯科技工教育の課題」

：岡山歯科技工専門学院　教務部長　松下　正勝

⑤ 「インジウムの取り扱いについて」

：東京医科歯科大学附属病院　技工部　技師長　松原　恒

⑥ 「医科との連携診療」

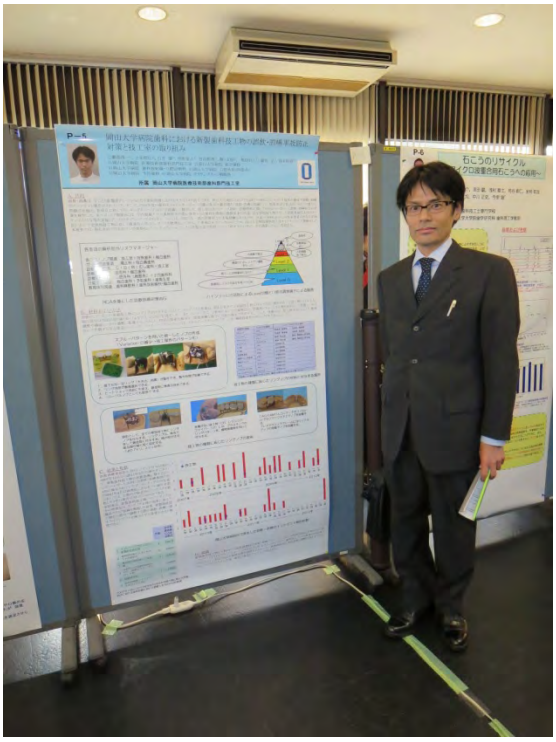
：岡山大学病院　医療支援部副部長　曽我　賢彦

・3 月 18 日（火）岡山大学病院の医療現場からの開発ニーズ発表会

「CAD/CAM クラウンのコーティング、粉塵飛散シールドとボックス、緊急用レジン」

：竹内　哲男

（図３）



（図４）

（図５）

「編集後記」

皆様のおかげをもちまして「歯学だより vol.9」を無事発刊する事が出来ました。たいへんお忙しい中、快くご執筆を下さいました諸先生方にこころから感謝いたします。

歯科医学教育、歯科医療、歯科医学研究への社会的ニーズはますます多様化しており、我々に求められるものは日々目まぐるしく変化しています。この社会へのニーズに応えるべく、岡山大学歯学部は様々な活動を行っていますが、このような形で広くその活動を発信することは大変重要であると思います。改めて「歯学だより」発刊に御協力いただきました関係者の方に深くお礼申し上げます。

なお紙面等の制限もあり、平成 25 年度のすべて活動をご紹介できているわけではありません。本誌ではご紹介出来ませんでしたが、岡山大学歯学部に関わりのある多くの方々が、さまざまなフィールドで素晴らしい活躍をされていることを付け加えさせていただくと共に、本誌へ掲載できなかったことをこころよりお詫び申し上げます。

広報誌編集委員長　樋口　仁

歯科系広報専門部会（平成 25 年度 委員）

部会長	窪木 拓男
総合歯科	白井　肇
むし歯科	神農 泰生
歯周科	峯柴 淳二
クラウンブリッジ補綴科	水口　一
咬合・義歯補綴科	川上 滋央
口腔外科(再建系)	水川 展吉
口腔外科(病態系)	岸本 晃治
歯科麻酔科	樋口　仁
歯科放射線科・口腔診断科	此内 浩信
予防歯科	竹内 倫子
小児歯科	藤田 一世
矯正歯科	菅原 康代
スペシャルニーズ歯科センター	森　貴幸
歯科衛生士室	高橋 明子
技工室	神　桂二
医療情報部	小河 達之